

JAEA-Review 2022-065 DOI:10.11484/jaea-review-2022-065

アルファダストの検出を目指した 超高位置分解能イメージング装置の開発 (委託研究)

- 令和3年度 英知を結集した原子力科学技術・人材育成推進事業-

Development of High-resolution Imaging Camera for Alpha Dust (Contract Research) -FY2021 Nuclear Energy Science & Technology and Human Resource Development Project-

福島研究開発部門 福島研究開発拠点 廃炉環境国際共同研究センター 東北大学

> Collaborative Laboratories for Advanced Decommissioning Science, Fukushima Research Institute, Sector of Fukushima Research and Development Tohoku University

March 2023

Japan Atomic Energy Agency

日本原子力研究開発機構

本レポートは国立研究開発法人日本原子力研究開発機構が不定期に発行する成果報告書です。 本レポートはクリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。 本レポートの成果(データを含む)に著作権が発生しない場合でも、同ライセンスと同様の 条件で利用してください。(<u>https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja</u>) なお、本レポートの全文は日本原子力研究開発機構ウェブサイト(<u>https://www.jaea.go.jp</u>) より発信されています。本レポートに関しては下記までお問合せください。

国立研究開発法人日本原子力研究開発機構 JAEA イノベーションハブ 研究成果利活用課 〒 319-1195 茨城県那珂郡東海村大字白方 2 番地 4 電話 029-282-6387, Fax 029-282-5920, E-mail:ird-support@jaea.go.jp

This report is issued irregularly by Japan Atomic Energy Agency. This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License (<u>https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.en</u>).

Even if the results of this report (including data) are not copyrighted, they must be used under the same terms and conditions as CC-BY.

For inquiries regarding this report, please contact Institutional Repository and Utilization Section, JAEA Innovation Hub, Japan Atomic Energy Agency.

2-4 Shirakata, Tokai-mura, Naka-gun, Ibaraki-ken 319-1195 Japan

Tel +81-29-282-6387, Fax +81-29-282-5920, E-mail:ird-support@jaea.go.jp

© Japan Atomic Energy Agency, 2023

アルファダストの検出を目指した超高位置分解能イメージング装置の開発 (委託研究)

一令和3年度英知を結集した原子力科学技術・人材育成推進事業-

日本原子力研究開発機構 福島研究開発部門 福島研究開発拠点 廃炉環境国際共同研究センター

東北大学

(2022年11月15日受理)

日本原子力研究開発機構(JAEA)廃炉環境国際共同研究センター(CLADS)では、令和3年度英知を結集した原子力科学技術・人材育成推進事業(以下、「本事業」という)を実施している。

本事業は、東京電力ホールディングス株式会社福島第一原子力発電所の廃炉等をはじめとした 原子力分野の課題解決に貢献するため、国内外の英知を結集し、様々な分野の知見や経験を、従 前の機関や分野の壁を越えて緊密に融合・連携させた基礎的・基盤的研究及び人材育成を推進す ることを目的としている。

平成 30 年度の新規採択課題から実施主体を文部科学省から JAEA に移行することで、JAEA とア カデミアとの連携を強化し、廃炉に資する中長期的な研究開発・人材育成をより安定的かつ継続 的に実施する体制を構築した。

本研究は、研究課題のうち、平成30年度に採択された「アルファダストの検出を目指した超高 位置分解能イメージング装置の開発」の平成30年度から令和3年度の研究成果について取りまと めたものである。本課題は令和3年度が最終年度となるため4年度分の成果を取りまとめた。

本研究は、スミヤろ紙上に付着するより細かい α 線核種を含む微細なダストの詳細な分布を可 視化することを可能にする技術の開発を目的の1つとする。この目的を満たすためには、これま での研究から、シンチレータ信号の効率化と、発光した信号の収集効率の向上が必要であり、そ の工夫を行い、位置分解能10 μm 以下を達成することができた。

これらの研究課題の過程で、新たなシンチレータ材料の創成が期待でき、上記のαダストモニ タのみならず、多くの応用が期待できた。特に当該研究に関連して、非常に高い線量率場におけ る線量率の分布を、光ファイバーを用いて測定できるかもしれないとの着想を得た。そこで、光 ファイバーを用いた高線量率モニタの実証についても、最大数 kSv/h 程度の線量率下の環境で実 施することができた。

本報告書は、日本原子力研究開発機構の英知事業における委託業務として、東北大学が実施した成果を取りまとめたものである。

廃炉環境国際共同研究センター:〒979-1151 福島県双葉郡富岡町大字本岡字王塚 790-1

JAEA-Review 2022-065

Development of High-resolution Imaging Camera for Alpha Dust (Contract Research)

- FY2021 Nuclear Energy Science & Technology and Human Resource Development Project -

Collaborative Laboratories for Advanced Decommissioning Science, Fukushima Research Institute, Sector of Fukushima Research and Development Japan Atomic Energy Agency Tomioka-machi, Futaba-gun, Fukushima-ken

Tohoku University

(Received November 15, 2022)

The Collaborative Laboratories for Advanced Decommissioning Science (CLADS), Japan Atomic Energy Agency (JAEA), had been conducting the Nuclear Energy Science & Technology and Human Resource Development Project (hereafter referred to "the Project") in FY2021.

The Project aims to contribute to solving problems in the nuclear energy field represented by the decommissioning of the Fukushima Daiichi Nuclear Power Station, Tokyo Electric Power Company Holdings, Inc. (TEPCO). For this purpose, intelligence was collected from all over the world, and basic research and human resource development were promoted by closely integrating/collaborating knowledge and experiences in various fields beyond the barrier of conventional organizations and research fields.

The sponsor of the Project was moved from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology to JAEA since the newly adopted proposals in FY2018. On this occasion, JAEA constructed a new research system where JAEA-academia collaboration is reinforced and medium-to-long term research/development and human resource development contributing to the decommissioning are stably and consecutively implemented.

Among the adopted proposals in FY2018, this report summarizes the research results of the "Development of high-resolution imaging camera for alpha dust" conducted from FY2018 to FY2021. Since the final year of this proposal was FY2021, the results for four fiscal years were summarized.

The present study aims to develop a novel alpha-ray camera consisting of imaging and an energy spectrometer to find the alpha dust to reduce the risk of health damage in decommissioning. We have developed the camera with a position resolution of less than 10 μ m, and the measurement test for the energy spectra was operated using several alpha-ray sources with an unfolding method. In addition, we have also developed a high-dose-rate monitor system consisting of novel scintillators with red/infra-red emission bands and optical fiber, and demonstrated under high-dose rate condition up to a few kSv/h.

Keywords: Alpha Dust, Scintillator, Unfolding, Imaging, Red and Infrared Emission Band, Optical Fiber This work was performed by Tohoku University under contract with Japan Atomic Energy Agency.

目次

1.	英知を結集した原子力科学技術・人材育成推進事業の概要1	
2.	平成 30 年度 採択課題 2	;
3.	令和元年度 採択課題 5)
4.	令和2年度 採択課題	,
5.	令和3年度 採択課題 10)
付約	録 成果報告書	5

Contents

1.	Outline c	of Nuclear	Energy	Science	& Tech	nology	and	Human	Resource	Developmen	t Proj	ect
	• • • • • • • • • •	•••••							•••••			. 1
2.	Accepted	Proposal	in FY20	18								. 2
3.	Accepted	Proposal	in FY20	19	• • • • • • •							. 5
4.	Accepted	Proposal	in FY20	20	• • • • • • •							. 8
5.	Accepted	Proposal	in FY20	21								. 10

Appendix Result Report	Appendix Resul	t Report				13
------------------------	----------------	----------	--	--	--	----

This is a blank page.

1. 英知を結集した原子力科学技術・人材育成推進事業の概要

文部科学省では、「東京電力(株)福島第一原子力発電所の廃止措置等研究開発の加速プラン(平 成26年6月文部科学省)」等を踏まえ、平成27年度から「英知を結集した原子力科学技術・人材 育成推進事業」(以下、「本事業」という。)を立ち上げ、「戦略的原子力共同研究プログラム」、「廃 炉加速化研究プログラム」及び「廃止措置研究・人材育成等強化プログラム」を推進している。

具体的には、国内外の英知を結集し、国内の原子力分野のみならず様々な分野の知見や経験を、 機関や分野の壁を越え、国際共同研究も含めて緊密に融合・連携させることにより、原子力の課 題解決に資する基礎的・基盤的研究や産学が連携した人材育成の取組を推進している。

一方、日本原子力研究開発機構(以下、「JAEA」という。)では、平成27年に廃炉国際共同研究 センター(以下、「CLADS」という。現:廃炉環境国際共同研究センター)を組織し、「東京電力ホ ールディングス(株)福島第一原子力発電所の廃止措置等に向けた中長期ロードマップ」等を踏 まえ、東京電力ホールディングス株式会社福島第一原子力発電所廃炉(以下、「1F廃炉」という。) に係る研究開発を進めている。

また、平成 29 年 4 月に CLADS の中核拠点である「国際共同研究棟」の運用を開始したことを踏 まえ、今後は CLADS を中核に、廃炉の現場ニーズを踏まえた国内外の大学、研究機関等との基礎 的・基盤的な研究開発及び人材育成の取組を推進することにより、廃炉研究拠点の形成を目指す ことが期待されている。

このため、本事業では平成 30 年度の新規採択課題から実施主体を文部科学省から JAEA に移行 することで、JAEA とアカデミアとの連携を強化し、廃炉に資する中長期的な研究開発・人材育成 をより安定的かつ継続的に実施する体制を構築することとし、従来のプログラムを、①共通基盤 型原子力研究プログラム、②課題解決型廃炉研究プログラム、③国際協力型廃炉研究プログラム、 ④研究人材育成型廃炉研究プログラム(令和元年度より新設)に再編した。

- 1 -

2. 平成 30 年度 採択課題

平成30年度採択課題については以下のとおりである。

課題数:19課題

共通基盤型原子力研究プログラム	11 課題	(若手研究6課題、	一般研究5課題)
課題解決型廃炉研究プログラム	6 課題		
国際協力型廃炉研究プログラム	2 課題	(日英共同研究)	

平成 30 年度 採択課題一覧

共通基盤型原子力研究プログラム

【若手研究】

課題名	研究代表者	所属機関
被災地探査や原子力発電所建屋内情報収集のための 半自律ロボットを用いたセマンティックサーベイマ ップ生成システムの開発	河野 仁	東京工芸大学
汚染土壌の減容を目的とした重液分離による放射性 微粒子回収法の高度化	山﨑 信哉	筑波大学
ラドンを代表としたアルファ核種の吸入による内部 被ばくの横断的生体影響評価	片岡 隆浩	岡山大学
炉心溶融物の粘性及び表面張力同時測定技術の開発	大石 佑治	大阪大学
iPS 細胞由来組織細胞における放射線依存的突然変 異計測系の確立	島田 幹男	東京工業大学
レーザー共鳴イオン化を用いた同位体存在度の低い ストロンチウム 90 の迅速分析技術開発	岩田 圭弘	東京大学

共通基盤型原子力研究プログラム

【一般研究】

課題名	研究代表者	所属機関
放射性核種の長期安定化を指向した使用済みゼオ ライト焼結固化技術の開発	新井 剛	芝浦工業大学
燃料デブリ取り出しを容易にするゲル状充填材の 開発	牟田 浩明	大阪大学
レーザー蛍光法を用いた燃料デブリ変質相の同定	斉藤 拓巳	東京大学
過酷炉心放射線環境における線量測定装置の開発	岡本 保	木更津工業 高等専門学校
レーザー加工により発生する微粒子の解析と核種 同定手法の開発	長谷川 秀一	東京大学

課題解決型廃炉研究プログラム

課題名	研究代表者	所属機関
合金相を含む燃料デブリの安定性評価のための基 盤研究	桐島 陽	東北大学
ガンマ線画像スペクトル分光法による高放射線場 環境の画像化による定量的放射能分布解析法	谷森 達	京都大学
燃料デブリ取出し時における放射性核種飛散防止 技術の開発	鈴木 俊一	東京大学
アルファダストの検出を目指した超高位置分解能 イメージング装置の開発	黒澤 俊介	東北大学
ナノ粒子を用いた透明遮へい材の開発研究	渡邉 隆行	九州大学
先端計測技術の融合で実現する高耐放射線燃料デ ブリセンサーの研究開発	萩原 雅之	高エネルギー 加速器研究機構

国際協力型廃炉研究プログラム(日英共同研究)

課題名	研究代表者	所属機関
放射性微粒子の基礎物性解明による廃炉作業リスク 低減への貢献	五十嵐 康人	茨城大学
放射線耐性の高い薄型 SiC 中性子検出器の開発	三澤 毅	京都大学

3. 令和元年度 採択課題

令和元年度採択課題については以下のとおりである。

課題数:19課題

共通基盤型原子力研究プログラム7 課題(若手研究2課題、一般研究5課題)課題解決型廃炉研究プログラム4 課題国際協力型廃炉研究プログラム4 課題(日英共同研究2課題、日露共同研究2課題)研究人材育成型廃炉研究プログラム4 課題

令和元年度 採択課題一覧

共通基盤型原子力研究プログラム

【若手研究】

課題名	研究代表者	所属機関
ウラニル錯体化学に基づくテーラーメイド型新規海 水ウラン吸着材開発	鷹尾 康一朗	東京工業大学
動作不能からの復帰を可能とする多連結移動ロボッ トの半自律遠隔操作技術の確立	田中 基康	電気通信大学

共通基盤型原子力研究プログラム

【一般研究】

課題名	研究代表者	所属機関
ー次元光ファイバ放射線センサを用いた原子炉建 屋内放射線源分布計測	瓜谷 章	名古屋大学
低線量・低線量率放射線被ばくによる臓器別酸化ス トレス状態の検討	鈴木 正敏	東北大学
単一微粒子質量分析法に基づくアルファ微粒子オ ンラインモニタリングに向けた基礎検討	豊嶋 厚史	大阪大学
幹細胞動態により放射線発がんを特徴付ける新た な評価系の構築	飯塚 大輔	量子科学技術 研究開発機構
耐放射線性ダイヤモンド半導体撮像素子の開発	梅沢 仁 (~R2.3.31) 大曲 新矢 (R2.4.1~)	産業技術総合 研究所

課題解決型廃炉研究プログラム

課題名	研究代表者	所属機関
Multi-Physics モデリングによる福島 2・3 号機ペデ スタル燃料デブリ深さ方向の性状同定	山路 哲史	早稲田大学
燃料デブリ取出しに伴い発生する廃棄物のフッ化 技術を用いた分別方法の研究開発	渡邉 大輔	日立GE ニュークリ ア・エナジー
アパタイトセラミックスによる ALPS 沈殿系廃棄物 の安定固化技術の開発	竹下 健二 (~R3.6.30) 塚原 剛彦 (R3.7.1~)	東京工業大学
拡張型スーパードラゴン多関節ロボットアームに よる圧力容器内燃料デブリ調査への挑戦	高橋 秀治	東京工業大学

国際協力型廃炉研究プログラム(日英共同研究)

課題名	研究代表者	所属機関
高い流動性および陰イオン核種保持性を有するア ルカリ刺激材料の探索と様々な放射性廃棄物の安 全で効果的な固化	佐藤 努	北海道大学
再臨界前の中性子線増に即応可能な耐放射線 FPGA システムの開発	渡邊 実	静岡大学 (~R3.3.31) 岡山大学 (R3.4.1~)

国際協力型廃炉研究プログラム(日露共同研究)

課題名	研究代表者	所属機関
燃料デブリ取出し臨界安全技術の高度化	小原 徹	東京工業大学
微生物生態系による原子炉内物体の腐食・変質に 関する評価研究	金井 昭夫	慶應義塾

研究人材育成型廃炉研究プログラム

課題名	研究代表者	所属機関
燃料デブリ取り出し時における炉内状況把握のた めの遠隔技術に関する研究人材育成	淺間 一	東京大学
化学計測技術とインフォマティックスを融合した デブリ性状把握手法の開発とタイアップ型人材育 成	高貝 慶隆	福島大学
放射線・化学・生物的作用の複合効果による燃料デ ブリ劣化機構の解明	大貫 敏彦 (~R2.3.31) 竹下 健二 (~R3.6.30) 塚原 剛彦 (R3.7.1~)	東京工業 大学
燃料デブリ分析のための超微量分析技術の開発	永井 康介	東北大学

JAEA-Review 2022-065

4. 令和2年度 採択課題

令和2年度は、2つのプログラムにおいて、研究課題の採択を決定した。 公募の概要は以下のとおりである。

公募期間: 令和2年3月17日~令和2年5月14日(課題解決型) 令和2年5月13日~令和2年7月15日(国際協力型)

課題数:10課題

課題解決型廃炉研究プログラム	8 課題	(若手研究2課題、	一般研究6副	果題)
国際協力型廃炉研究プログラム	2 課題	(日英共同研究)		

これらの提案について、外部有識者から構成される審査委員会において、書面審査及び面接審査、日英共同研究については二国間の合同審査を実施し、採択候補課題を選定した。

その後、PD(プログラムディレクター)・PO(プログラムオフィサー)会議での審議を経て、採 択課題を決定した。

令和2年度 採択課題一覧

課題解決型廃炉研究プログラム

【若手研究】

課題名	研究代表者	所属機関
燃料デブリにおける特性の経年変化と環境劣化割れ の調査	楊 会龍 (~R4.7.31) 村上 健太 (R4.8.1~)	東京大学
健全性崩壊をもたらす微生物による視認不可腐食の 分子生物・電気化学的診断及び抑制技術の開発	岡本 章玄	物質・材料 研究機構

課題解決型廃炉研究プログラム

【一般研究】

課題名	研究代表者	所属機関
遮蔽不要な臨界近接監視システム用ダイヤモンド 中性子検出器の要素技術開発	田中 真伸	高エネルギー 加速器研究 機構
α / β / γ 線ラジオリシス影響下における格納 容器系統内広域防食の実現:ナノバブルを用いた 新規防食技術の開発	渡邉 豊	東北大学
β、γ、X線同時解析による迅速・高感度放射性核 種分析法の開発	篠原 宏文	日本分析 センター
合理的な処分のための実機環境を考慮した汚染鉄 筋コンクリート長期状態変化の定量評価	丸山 一平	東京大学
溶脱による変質を考慮した汚染コンクリート廃棄 物の合理的処理・処分の検討	小崎 完	北海道大学
マイクロ波重畳 LIBS によるデブリ組成計測の高 度化と同位体の直接計測への挑戦	池田 裕二	アイラボ

国際協力型廃炉研究プログラム(日英共同研究)

課題名	研究代表者	所属機関
革新的水質浄化剤の開発による環境問題低減化技 術の開拓	浅尾 直樹	信州大学
無人航走体を用いた燃料デブリサンプルリターン 技術の研究開発	鎌田 創	海上・港湾・ 航空技術 研究所

5. 令和3年度 採択課題

令和3年度は、2つのプログラムにおいて、研究課題の採択を決定した。 公募の概要は以下のとおりである。

公募期間: 令和3年3月16日~令和3年5月17日(課題解決型) 令和3年4月13日~令和3年7月1日(国際協力型 日英共同研究) 令和3年7月12日~令和3年8月18日(国際協力型 日露共同研究)

課題数:12課題

課題解決型廃炉研究プログラム	8 課題	
国際協力型廃炉研究プログラム	2課題(日英)、2課題(日露)	

これらの提案について、外部有識者から構成される審査委員会において、書面審査及び面接審査、日英・日露共同研究については二国間の合同審査を実施し、採択候補課題を選定した。

その後、PD (プログラムディレクター)・PO (プログラムオフィサー) 会議及びステアリ ングコミッティでの審議を経て、採択課題を決定した。

令和3年度 採択課題一覧

課題解決型廃炉研究プログラム

課題名	研究代表者	所属機関
建屋応答モニタリングと損傷イメージング技術を 活用したハイブリッド型の原子炉建屋長期健全性 評価法の開発研究	前田 匡樹	東北大学
燃料デブリ周辺物質の分析結果に基づく模擬デブ リの合成による実機デブリ形成メカニズムの解明 と事故進展解析結果の検証によるデブリ特性デー ターベースの高度化	宇埜 正美	福井大学
ジオポリマー等による PCV 下部の止水・補修及び 安定化に関する研究	鈴木 俊一	東京大学
世界初の同位体分析装置による少量燃料デブリの 性状把握分析手法の確立	坂本 哲夫	工学院大学
アルファ微粒子の実測に向けた単一微粒子質量分 析法の高度化	豊嶋 厚史	大阪大学

課題名	研究代表者	所属機関
連携計測による線源探査ロボットシステムの開発 研究	人見 啓太朗	東北大学
中赤外レーザー分光によるトリチウム水連続モニ タリング手法の開発	安原 亮	自然科学 研究機構
福島原子力発電所事故由来の難固定核種の新規ハ イブリッド固化への挑戦と合理的な処分概念の構 築・安全評価	中瀬 正彦	東京工業 大学

国際協力型廃炉研究プログラム(日英共同研究)

課題名	研究代表者	所属機関
福島第一原子力発電所の廃止措置における放射性 エアロゾル制御及び除染に関する研究	Erkan Nejdet (~R4.1.31) 三輪 修一郎 (R4.2.1~)	東京大学
燃料デブリ取り出しのための機械式マニピュレー タのナビゲーションおよび制御	淺間 一	東京大学

国際協力型廃炉研究プログラム(日露共同研究)

課題名	研究代表者	所属機関
福島第一発電所 2、3 号機の事故進展シナリオに基 づく FP・デブリ挙動の不確かさ低減と炉内汚染状 況・デブリ性状の把握	小林 能直	東京工業 大学
非接触測定法を用いた燃料デブリ臨界解析技術の 高度化	小原 徹	東京工業 大学

本報告書は、以下の課題の平成30年度から令和3年度の研究成果について取りまとめたものである。本課題は令和3年度が最終年度となるため4年度分の成果を取りまとめた。

課題解決型廃炉研究プログラム

課題名	研究代表者	所属機関
アルファダストの検出を目指した超高位置分 解能イメージング装置の開発	黒澤 俊介	東北大学

研究成果を取りまとめた成果報告書を付録として添付する。

付録

成果報告書

This is a blank page.

令和3年度

日本原子力研究開発機構

英知を結集した原子力科学技術・人材育成推進事業

アルファダストの検出を目指した超高位置

分解能イメージング装置の開発

(契約番号 R03I104-1)

成果報告書

令和4年3月 国立大学法人東北大学

JAEA-Review 2022-065

本報告書は、国立研究開発法人日本原子力研究開発機構の 「英知を結集した原子力科学技術・人材育成推進事業」によ る委託業務として、国立大学法人東北大学が実施した「ア ルファダストの検出を目指した超高位置分解能イメージン グ装置の開発」の平成30年度から令和3年度の研究成果を 取りまとめたものです。

目次

概略
1. はじめに1.1-1
2. 業務計画 2.1-1 2.1 全体計画 2.1-1 2.1.1 計画表 2.1-1 2.1.2 実施体制図 2.1-2 2.2 各年度の成果の目標及び業務の実施方法 2.2-1 2.2.1 平成 30 年度 2.2-1 2.2.2 令和元年度 2.2-2
2.2.3 令和 2 年度 2.2-3 2.2.4 令和 3 年度 2.2-4
 業務の実施内容及び成果
 3.2 α デブリ(α ダスト)検出器の開発【平成 30 年度~令和元年度】
 3.3 高線量下モニタなどへの展開【令和元年度~令和3年度】
3.4 研究推進 3.4-1
4. 結言4-1
参考文献

執筆者リスト

事業代表者	国立大学法人東北大学	准教授	黒澤 俊介
再委託先	三菱電機株式会社	グループマネージャー	林 真照
連携先	国立研究開発法人日本原		
		研究員	森下 祐樹

表一覧

表 3.1.1-1	(Gd _{1-0.01-y} Ce _{0.01} Y _y) ₃ Ga ₃ Al ₂ O ₁₂ の発光波長 3.1-4
表 3.1.1-2	(Gd _{1-0.01-y} Ce _{0.01} Y _y) ₃ Ga ₃ A1 ₂ O ₁₂ の発光量
表 3.2.2-1	シミュレーションモデルの構成部材3.2-4
表 3.2.2-2	光電子増倍管を用いた測定条件3.2-6
表 3.2.2-3	CMOS カメラを用いた測定条件 3.2-8
表 3.2.2-4	光電子増倍管を用いた測定条件3.2-10
表 3.2.2-5	シリコン半導体検出器を用いた測定条件3.2-12
表 3.2.2-6	実サンプルの線源データ3.2-17
表 3.2.2-7	線源データとアンフォールディング結果の比較3.2-19
表 3.2.2-8	光学倍率と分解能、視野の関係3.2-27

図一覧

⊠ 2.1-1	本業務の全体図	2.1-2
図 2.1-2	組織図	2. 1-2
図 3.1.1-1	チョクラルスキー法の概念図	3. 1-1
図 3.1.1-2	結晶育成時の様子	3. 1-2
図 3.1.1-3	育成した(Gd _{1-x-y} Ce _x Y _y) ₃ Ga ₃ Al ₂ O ₁₂ 結晶の写真	3. 1-3
図 3.1.1-4	発光量測定のセットアップ	3. 1-3
図 3.1.1-5	(Gd _{1-0.01-0.5/3} Ce _{0.01} Y _{0.5/3}) ₃ Ga ₃ Al ₂ O ₁₂ の発光波長スペクトル	3. 1-4
図 3.1.1-6	(Gd _{1-0.01-y} Ce _{0.01} Y _y) ₃ Ga ₃ Al ₂ O ₁₂ の波高値スペクトル	3. 1-5
⊠ 3.1.1-7	結晶の加工	3. 1-6
図 3.1.1-8	ブリッジマン法の概念図	3. 1-7
⊠ 3.2.1−1	撮像テスト機の概念図	3. 2-1
⊠ 3.2.1-2	撮像テストの結果	3. 2-2
_		
⊠ 3.2.2-1	解析モデル	3. 2-3
⊠ 3.2.2-2	プラスチックシンチレータへの付与エネルギー計算結果	3. 2-4
⊠ 3.2.2-3	プラスチックシンチレータ出力のシミュレーション結果	3. 2-5
⊠ 3.2.2-4	光電子増倍管を用いた測定装置のセットアップ	3. 2-6
⊠ 3.2.2-5	光電子増倍管を用いたエネルギースペクトル取得結果	3. 2-7
⊠ 3.2.2-6	CMOS カメラを用いた測定装置のセットアップ	3. 2-8
⊠ 3.2.2-7	線源位置の測定結果	3. 2-8
図 3.2.2-8	測定値とシミュレーション結果の比較	3. 2-9
⊠ 3.2.2-9	光電子増倍管を用いた測定装置のセットアップ	3. 2-10
図 3.2.2-10	光電子増倍管を用いたエネルギースペクトル取得結果	3. 2-11
図 3.2.2-11	シリコン半導体検出器を用いた測定装置構成	3. 2-11
⊠ 3.2.2-12	シリコン半導体検出器を用いたエネルギースペクトル取得結果	3. 2-12
⊠ 3.2.2-13	測定値とシミュレーション結果の比較	3. 2-13
⊠ 3.2.2-14	応答関数での線源エネルギーと検出器付与エネルギーの関係	3. 2-14
⊠ 3.2.2-15	測定(左)とアンフォールディング適用後のスペクトル(右)	3. 2-15
⊠ 3.2.2-16	改良したエネルギースペクトル測定装置でのセットアップ	3. 2-16
⊠ 3.2.2-17	実サンプルの写真	3. 2-16
図 3.2.2-18	実サンプルのエネルギースペクトル測定結果	3. 2-17
図 3.2.2-19	実サンプル測定に対するアンフォールディング結果	3. 2-18
図 3.2.3-1	ポータブルダストサンプラ(左)と HE-40T ろ紙(右)	3. 2-19
図 3.2.3-2	スミヤろ紙を用いた粒子のサンプリング試験	3. 2-20
図 3.2.3-3	東北大学から受け取ったシンチレータ	3. 2-21
⊠ 3.2.3-4	測定のセットアップ	3. 2-22

⊠ 3.2.3-5	粉末状シンチレータ3.2-22
⊠ 3.2.3-6	光学画像
図 3.2.3-7	ランタンマントルを線源として用いて得られた画像
図 3.2.3-8	β線イメージング結果3.2-24
⊠ 3.2.3-9	粉末状シンチレータを用いて撮像した放射線イメージ3.2-25
図 3.2.3-10	超高位置分解能 α線イメージング装置3.2-26
⊠ 3.2.3-11	各倍率でのテストチャートの光学画像3.2-27
⊠ 3.2.3-12	各倍率でのα線の画像3.2-28
⊠ 3.2.3-13	α線の強度プロファイル 3.2-28
⊠ 3.2.3-14	プルトニウム粒子から放出されるα線の画像(光学倍率5倍)3.2-29
⊠ 3.2.3-15	プルトニウム粒子から放出されるα線の画像3.2-29
⊠ 3.2.3-16	測定時間ごとの計数値変化3.2-29
⊠ 3.2.3-17	開発した超高位置分解能α線イメージング装置3.2-31
⊠ 3.2.3-18	β線源測定の概念図3.2-31
⊠ 3.2.3-19	²²² Rn 子孫核種測定の概念図 3.2-32
⊠ 3.2.3-20	α線スポットの例3.2-33
⊠ 3.2.3-21	シミュレーション計算体系3.2-34
⊠ 3.2.3-22	ノイズとなるβ線の撮像評価3.2-35
⊠ 3.2.3-23	α線の撮像評価3.2-35
⊠ 3.2.3-24	30 分測定で取得した ²²² Rn 子孫核種の画像
⊠ 3.2.3-25	α線計数率から PuO2粒子の等価粒径への換算曲線 3.2-37
⊠ 3. 2. 3-25 ⊠ 3. 2. 3-26	α線計数率から Pu02粒子の等価粒径への換算曲線 3.2-37 開発したα線イメージング装置のモバイル電源での作動確認 3.2-38
図 3.2.3-25 図 3.2.3-26	α線計数率から Pu02粒子の等価粒径への換算曲線 3.2-37 開発したα線イメージング装置のモバイル電源での作動確認 3.2-38
 図 3. 2. 3-25 図 3. 2. 3-26 図 3. 2. 4-1 	 α線計数率から Pu02粒子の等価粒径への換算曲線
 ⋈ 3. 2. 3-25 ⋈ 3. 2. 3-26 ⋈ 3. 2. 4-1 ⋈ 3. 2. 4-2 	 α線計数率から Pu02粒子の等価粒径への換算曲線
 ⋈ 3. 2. 3-25 ⋈ 3. 2. 3-26 ⋈ 3. 2. 4-1 ⋈ 3. 2. 4-2 ⋈ 3. 2. 4-3 	 α線計数率からPu02粒子の等価粒径への換算曲線
 ⋈ 3. 2. 3-25 ⋈ 3. 2. 3-26 ⋈ 3. 2. 4-1 ⋈ 3. 2. 4-2 ⋈ 3. 2. 4-3 ⋈ 3. 2. 4-4 	 α線計数率からPu0₂粒子の等価粒径への換算曲線
 ⋈ 3. 2. 3-25 ⋈ 3. 2. 3-26 ⋈ 3. 2. 4-1 ⋈ 3. 2. 4-2 ⋈ 3. 2. 4-3 ⋈ 3. 2. 4-4 ⋈ 3. 2. 4-5 	a線計数率からPu02粒子の等価粒径への換算曲線3.2-37開発したa線イメージング装置のモバイル電源での作動確認3.2-38検出器外観3.2-39aデブリ検出器の設計概念図3.2-40aデブリ検出器の外観3.2-41テストチャートの写真3.2-41位置分解能評価の様子3.2-42
 ※ 3. 2. 3-25 ※ 3. 2. 3-26 ※ 3. 2. 4-1 ※ 3. 2. 4-2 ※ 3. 2. 4-3 ※ 3. 2. 4-4 ※ 3. 2. 4-5 ※ 3. 2. 4-6 	α線計数率から Pu0 ₂ 粒子の等価粒径への換算曲線
 ⊠ 3. 2. 3-25 ⊠ 3. 2. 3-26 ⊠ 3. 2. 4-1 ⊠ 3. 2. 4-2 ⊠ 3. 2. 4-3 ⊠ 3. 2. 4-4 ⊠ 3. 2. 4-5 ⊠ 3. 2. 4-6 ⊠ 3. 2. 4-7 	α線計数率からPu02粒子の等価粒径への換算曲線
 ※ 3. 2. 3-25 ※ 3. 2. 3-26 ※ 3. 2. 4-1 ※ 3. 2. 4-2 ※ 3. 2. 4-3 ※ 3. 2. 4-4 ※ 3. 2. 4-5 ※ 3. 2. 4-6 ※ 3. 2. 4-7 ※ 3. 2. 4-8 	α線計数率から Pu0 ₂ 粒子の等価粒径への換算曲線
 ⊠ 3. 2. 3-25 ⊠ 3. 2. 4-1 ⊠ 3. 2. 4-2 ⊠ 3. 2. 4-3 ⊠ 3. 2. 4-3 ⊠ 3. 2. 4-5 ⊠ 3. 2. 4-6 ⊠ 3. 2. 4-7 ⊠ 3. 2. 4-8 ⊠ 3. 2. 4-9 	α線計数率からPu02粒子の等価粒径への換算曲線
 ※ 3. 2. 3-25 ※ 3. 2. 3-26 ※ 3. 2. 4-1 ※ 3. 2. 4-2 ※ 3. 2. 4-3 ※ 3. 2. 4-4 ※ 3. 2. 4-5 ※ 3. 2. 4-6 ※ 3. 2. 4-7 ※ 3. 2. 4-8 ※ 3. 2. 4-9 ※ 3. 2. 4-10 	 α線計数率から Pu02粒子の等価粒径への換算曲線
 ⊠ 3. 2. 3-25 ⊠ 3. 2. 3-26 ⊠ 3. 2. 4-1 ⊠ 3. 2. 4-2 ⊠ 3. 2. 4-3 ⊠ 3. 2. 4-4 ⊠ 3. 2. 4-5 ⊠ 3. 2. 4-6 ⊠ 3. 2. 4-7 ⊠ 3. 2. 4-8 ⊠ 3. 2. 4-9 ⊠ 3. 2. 4-10 ⊠ 3. 2. 4-11 	 α線計数率から Pu02粒子の等価粒径への換算曲線
 ※ 3. 2. 3-25 ※ 3. 2. 3-26 ※ 3. 2. 4-1 ※ 3. 2. 4-2 ※ 3. 2. 4-3 ※ 3. 2. 4-3 ※ 3. 2. 4-5 ※ 3. 2. 4-5 ※ 3. 2. 4-6 ※ 3. 2. 4-7 ※ 3. 2. 4-8 ※ 3. 2. 4-9 ※ 3. 2. 4-10 ※ 3. 2. 4-11 ※ 3. 2. 4-12 	 α線計数率から Pu02粒子の等価粒径への換算曲線
 ※ 3. 2. 3-25 ※ 3. 2. 3-26 ※ 3. 2. 4-1 ※ 3. 2. 4-2 ※ 3. 2. 4-3 ※ 3. 2. 4-3 ※ 3. 2. 4-5 ※ 3. 2. 4-6 ※ 3. 2. 4-6 ※ 3. 2. 4-7 ※ 3. 2. 4-8 ※ 3. 2. 4-9 ※ 3. 2. 4-10 ※ 3. 2. 4-11 ※ 3. 2. 4-12 ※ 3. 3. 1-1 	 α線計数率から Pu0₂粒子の等価粒径への換算曲線
$\begin{array}{c} \boxtimes 3. 2. 3-25 \\ \boxtimes 3. 2. 3-26 \\ \hline \boxtimes 3. 2. 4-1 \\ \boxtimes 3. 2. 4-2 \\ \boxtimes 3. 2. 4-3 \\ \boxtimes 3. 2. 4-3 \\ \boxdot 3. 2. 4-3 \\ \boxdot 3. 2. 4-5 \\ \boxdot 3. 2. 4-5 \\ \boxdot 3. 2. 4-6 \\ \boxdot 3. 2. 4-6 \\ \boxdot 3. 2. 4-7 \\ \boxdot 3. 2. 4-7 \\ \boxdot 3. 2. 4-9 \\ \boxdot 3. 2. 4-9 \\ \boxdot 3. 2. 4-10 \\ \boxdot 3. 2. 4-11 \\ \boxdot 3. 2. 4-12 \\ \hline \boxtimes 3. 2. 4-12 \\ \boxdot 3. 3. 1-1 \\ \boxdot 3. 3. 1-2 \\ \end{array}$	 α線計数率から Pu02粒子の等価粒径への換算曲線
 ⊠ 3. 2. 3-25 ⊠ 3. 2. 3-26 ⊠ 3. 2. 4-1 ⊠ 3. 2. 4-2 ⊠ 3. 2. 4-3 ⊠ 3. 2. 4-3 ⊠ 3. 2. 4-5 ⊠ 3. 2. 4-6 ⊠ 3. 2. 4-6 ⊠ 3. 2. 4-7 ⊠ 3. 2. 4-7 ⊠ 3. 2. 4-9 ⊠ 3. 2. 4-10 ⊠ 3. 2. 4-11 ⊠ 3. 2. 4-12 ⊠ 3. 3. 1-1 ⊠ 3. 3. 1-2 ⊠ 3. 3. 1-3 	 α線計数率から Pu02粒子の等価粒径への換算曲線
$\begin{array}{c} \boxtimes 3. 2. 3-25 \\ \boxtimes 3. 2. 3-26 \\ \hline \boxtimes 3. 2. 4-1 \\ \boxtimes 3. 2. 4-2 \\ \boxtimes 3. 2. 4-3 \\ \boxtimes 3. 2. 4-3 \\ \boxtimes 3. 2. 4-5 \\ \boxtimes 3. 2. 4-5 \\ \boxtimes 3. 2. 4-6 \\ \boxtimes 3. 2. 4-6 \\ \boxtimes 3. 2. 4-6 \\ \boxtimes 3. 2. 4-7 \\ \boxtimes 3. 2. 4-7 \\ \boxtimes 3. 2. 4-10 \\ \boxtimes 3. 2. 4-10 \\ \boxtimes 3. 2. 4-10 \\ \boxtimes 3. 2. 4-11 \\ \boxtimes 3. 2. 4-12 \\ \boxtimes 3. 2. 4-12 \\ \boxtimes 3. 2. 4-12 \\ \boxtimes 3. 3. 1-1 \\ \boxtimes 3. 3. 1-2 \\ \boxtimes 3. 3. 1-3 \\ \boxtimes 3. 3. 1-4 \end{array}$	 α線計数率から Pu02粒子の等価粒径への換算曲線
$\begin{array}{c} \boxtimes 3. 2. 3-25 \\ \boxtimes 3. 2. 3-26 \\ \hline \boxtimes 3. 2. 4-1 \\ \boxtimes 3. 2. 4-2 \\ \boxtimes 3. 2. 4-3 \\ \boxtimes 3. 2. 4-3 \\ \boxtimes 3. 2. 4-3 \\ \boxtimes 3. 2. 4-5 \\ \boxdot 3. 2. 4-6 \\ \hline \boxtimes 3. 2. 4-6 \\ \hline \boxtimes 3. 2. 4-7 \\ \hline \boxtimes 3. 2. 4-7 \\ \hline \boxtimes 3. 2. 4-7 \\ \hline \boxtimes 3. 2. 4-10 \\ \hline \boxtimes 3. 2. 4-10 \\ \hline \boxtimes 3. 2. 4-11 \\ \hline \boxtimes 3. 2. 4-12 \\ \hline \boxtimes 3. 2. 4-12 \\ \hline \boxtimes 3. 2. 4-12 \\ \hline \boxtimes 3. 3. 1-1 \\ \hline \boxtimes 3. 3. 1-2 \\ \hline \boxtimes 3. 3. 1-3 \\ \hline \boxtimes 3. 3. 1-4 \\ \hline \boxtimes 3. 3. 1-5 \\ \hline \end{array}$	 α線計数率から Pu02粒子の等価粒径への換算曲線

図 3.3.1-6	京都大学複合原子力科学研究所のシンチレータの線源部分への配置の様子.3.3-6
図 3.3.1-7	単純積分型仕様での結果の一例3.3-7
図 3.3.1-8	単純積分型仕様での線量と電流値の関係3.3-7
🗵 3. 3. 1-9	分光型仕様で得られた発光スペクトル3.3-8
図 3.3.1-10	分光型仕様での線量と電流値の関係3-8
図 3.3.1-11	CH 法の概念図3.3-10
⊠ 3.3.1-12	Ce 添加 Y ₃ A1 ₅ O ₁₂ 結晶の写真 3.3-11
⊠ 3.3.1-13	CH 法で育成した Yb:LHO 結晶 (研磨後)の写真と比較用のルビーの写真.3.3-11
⊠ 3.3.1-14	開発した光ファイバーのアクセサリー部品などの写真3.3-12
⊠ 3.3.1-15	校正曲線を求めるための積分範囲を示した発光波長スペクトルの概念図(a)
	と校正曲線(b) 3.3-13
⊠ 3.3.1-16	通信系ケーブルの最適化作業の様子(一例)3.3-14
⊠ 3.3.1-17	光電子増倍管と光学フィルタをマウントした写真3.3-15
⊠ 3.3.1-18	光電子増倍管を用いた単純積分型仕様+光学フィルタでの信号3.3-16

略語一覧

: Japan Atomic Energy Agency (国立研究開発法人日本原子力研究開発機構)			
: Collaborative Laboratories for Advanced Decommissioning Science			
(廃炉環境国際共同研究センター)			
: 東京電力ホールディングス株式会社福島第一原子力発電所			
: GEometry ANd Tracking 4			
:Silicon-Photo Diode (シリコンフォトダイオード)			
:国立研究開発法人日本原子力研究開発機構 核燃料サイクル工学研究所			
: 東京電力ホールディングス株式会社			

概略

東京電力ホールディングス株式会社福島第一原子力発電所(以下、「1F」と略す。)の廃炉を実 現するなかで、α線核種を含むダストの吸引による作業員の内部被ばくの可能性が指摘されてお り、ダストの性質が不明なままでは、たとえ低線量率であっても作業員の立ち入りに制限がかけ られる可能性がある。迅速な廃炉に向けて、いずれ必要になる作業員の立ち入りに際して、どの ような核種で、どの程度の粒形のダストが存在するかは、把握すべき重要な課題である(研究の 背景)。

ここで、ダストの大きさとしては、不明ではあるものの、これまでの核燃料施設・MOX 加工施設 でのダストから推測として 10 µm 程度以下であると考えられることから、少なくとも 10 µm 程度 以下の位置分解能を持つダストの観測ができる装置が必要である。しかしながら、これまでに、 それらを満たすような検出器が開発されていない(解決すべき課題)。

そこで、本研究では、スミヤろ紙上に付着するより細かい a 線核種を含む微細なダストの詳細 な分布を可視化することを可能にする技術の開発を目的の1つとする。 a 線の撮像には、半導体 による直接検出型も検討できるが、より簡便であるシンチレータを用いた方法が近道と考えてい る。これまでも、同様の撮像装置の開発は行われてきており、100 µm 程度の位置分解能であれ ば、先行研究として、研究代表者が開発しているからである。この目的を満たすためには、これ までの研究から、シンチレータ信号の効率化と、発光した信号の収集効率の向上が必要である。 前者は、シンチレータの発光量を上げること、ないしは、発光波長を光検出器の波長感度がもっ とも良い波長域に合わせることを行うことである。また、後者は、発光した光をいかに効率的に 光検出器へ伝達させるか、そのためのシンチレータの形状やレンズの工夫を行うことである(本 研究の目的その1)。

これらの研究課題の過程で、新たなシンチレータ材料の創成が期待でき、上記の α ダストモニ タのみならず、多くの応用が期待できる。特に当該研究に関連して、非常に高い線量率場におけ る線量率の分布を、光ファイバーを用いて測定できるかもしれないとの着想を得た。そこで、光 ファイバーを用いた高線量率モニタの実証についても、本研究の目的とした(本研究の目的そ の 2)。

当初の研究期間である平成30年度から令和2年度までに、結晶材料の開発として、高発光量・ 長波長発光シンチレータ材料の開発を国立大学法人東北大学(以下、「東北大学」と略す。)にて 行い、α線核種の撮像検出器の準備を進めた。その中で、Cs₂HfI₆(以下、「CHI」と略す。)などの 革新的な材料の探索を進めることができた。

三菱電機株式会社(以下、「三菱電機」と略す。)では、α線核種のエネルギー分別に関する装置開発を行い、実環境で想定される α ダストの実サンプルでのエネルギースペクトルを取得し、 その取得データに対して、Geant4 などのシミュレーションで作成した応答関数を用いて、アンフ オールディング法を適用し複数の放射性核種が含まれる条件においても線源スペクトルを取得で きることを確認した。これにより α ダストに対してアンフォールディング法が適用できることを 実証した。

国立研究開発法人日本原子力研究開発機構(以下、「JAEA」と略す。)では、上記三菱電機や東 北大学で開発してきた装置の実証試験といった、目的その1に該当する実施内容を実施した。

これら、三者の連携により、イメージング検出器については、目標となる位置分解能を達成し、 検出器として組み立て、目的その1に対する目標を達成した。 目的その2に対応する作業として、高線量下モニタなどへの展開について、当初研究計画では、 期間全体の2年目と3年目(令和元年度~令和2年度)で実施する予定であったが、予想以上の 進展があったことから、延長し、令和3年度に当該項目のみ開発を進めた(本研究の実施内容)。 そして、1Fでの実証試験などを行うことができ、各年度に掲げていた目標をすべて達成すること ができた。さらに、東北大学を中心に高線量率モニタなどを中心とした応用を目指し、高発光量・ 長波長発光シンチレータの高性能化を進めた。特に、潮解性が無視できる酸化物での材料探索を 進め、そのための結晶育成方法も開発した。

これまでに、光ファイバーを用いた高線量モニタ、コア・ヒーティング法(以下、「CH法」と略 す。)の開発、及び、αダストモニタの開発の3点についてプレスリリースも行うことができ、一 部は新聞報道、テレビ放送された(本研究の成果(特に世界初、国内初等アピールすべき成果))。

前年度までの報告書:

- ・アルファダストの検出を目指した超高位置分解能イメージング装置の開発(委託研究); 平成 30年度英知を結集した原子力科学技術・人材育成推進事業, JAEA-Review 2019-038, https://doi.org/10.11484/jaea-review-2019-038
- ・アルファダストの検出を目指した超高位置分解能イメージング装置の開発(委託研究);令和 元年度英知を結集した原子力科学技術・人材育成推進事業,JAEA-Review 2020-039, https://doi.org/10.11484/jaea-review-2020-039
- ・アルファダストの検出を目指した超高位置分解能イメージング装置の開発(委託研究);令和2年度英知を結集した原子力科学技術・人材育成推進事業,JAEA-Review 2021-044, https://doi.org/10.11484/jaea-review-2021-044

1. はじめに

1Fの廃炉を迅速に行うために、まずは炉内のデブリなどに含まれる放射性物質の分布、言い換えれば線量分布を把握する必要がある。そして、作業員の立ち入りの際の安全の確保のための α 線核種を含むダスト(αダスト)の炉内の分布を明らかにする技術の実現が求められている。

ダストとして舞う放射線核種、特に体内被ばくの影響が高い α 線を放出する核種を含むダスト やデブリの取り扱いは重要な問題である。仮に 10 μm 程度の直径をもつダストの場合、マスク等 の防護では体内への取り込みを完全に防げない可能性があり、体内被ばくのリスクが高まる。α 線核種は、その半減期が 100 年以上であり、どうしても無視できない問題である。

そもそも、どのようなダストやデブリが存在するかが分かっておらず、その核種、ダストサイズの形状の把握が、まずは喫緊かつ重要となっている。ダストの大きさとしては、不明ではあるものの、これまでの核燃料施設・MOX 加工施設でのダストから推測として 10 µm 程度以下であると考えられることから、まずはそのサイズを把握できるような撮像装置の開発が急がれている。

そこで、本研究において、2つの検出器の開発に着手した。

1つ目は、作業員の安全の確保のための α 線核種の炉内の分布を明らかにする技術の実現を目 指し、スミヤろ紙上に付着するより細かい α 線核種を含む微細なダストの詳細な分布を可視化す ることを可能にする技術の開発である。東北大学では撮像にかかる部分の検出器を開発し、三菱 電機ではその α 線のエネルギー情報を取得する部分の検出器を開発した。そして、試験を JAEA とともに行った。

撮像については、α線励起の発光体で10 μm以下の位置分解能をもつような検出器(「放射線 顕微鏡」)を開発してきた。そして、その最終組み立てと評価について、東北大学を中心に行った。 一方で、「エネルギー取得部分」を実現するため、実環境で想定されるノイズ要因を考慮したエネ ルギースペクトル取得装置の開発が必要である。また、エネルギースペクトル取得装置によるス ペクトルに対して、より核種弁別性能を向上させるためにアンフォールディング法を適用できる かどうかを検証することが必要である。これらについて、三菱電機が担当した。

上記の撮像とエネルギー取得部分についての、より実用に近い環境での評価について、JAEA が 担当した。

2 つ目の検出器は、光ファイバーを用いた超高線量率場での線量率モニタの開発である。これ は、1 つ目の検出器開発の一部である材料開発研究から派生した、いわば「スピンオフ」となるよ うな検出器開発であるが、1F での実機搭載を目指した開発を進めた。

- 2. 業務計画
- 2.1 全体計画
 - 2.1.1 計画表

本業務の全体計画図を図 2.1-1 に示す。各項目の簡単な流れは次の通りである。

(1) 高機能シンチレータの開発

はじめに、本研究の核となる高機能シンチレータの開発を東北大学で実施した。①機能的な構造をもつシンチレータ結晶の開発と②高発光量・長波長発光シンチレータ材料の開発の2つの作業を行い、材料開発のみならずその形状などについても検討を行った。

(2) *α* デブリ(*α* ダスト)検出器の開発

並行して、撮像とエネルギー取得を行う α デブリ検出器(αダスト検出器)の開発を、東北大 学、三菱電機及び JAEA と緊密な連携をとりながら実施した。東北大学及び三菱電機はそれぞれ、 「①イメージング検出器の開発」及び「②エネルギー取得部分の開発」を担当し、「③実証試験」 について JAEA が担当した。

(3) 高線量下モニタなどへの展開

東北大学で開発した新規シンチレータ材料を利用した、高線量下モニタなどへの展開も行った。 なお、本業務については、(1)高機能シンチレータの開発での進捗が順調に行ったことを踏まえて、 当初令和2年度のみの実施予定であったが、令和元年度に前倒しを行った。さらに、実証試験を 進められる環境が整いつつあったことから令和3年度に延長して実施を続けた。

また、これらのほかに報告書を編纂する作業、その他日々の進捗管理業務等などを実施した。

	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度
(1)高機能シンチレータの開発				
①機能的な構造をもつシンチレータ結晶の 開発 (東北大学)	結晶の育用			
②高発光量・長波長発光シンチレータ材料の 開発 (東北大学)	1 介 フィードバック	7		
(2) αデブリ検出器の開発	シンチレータ	aダスト新規検出 (イメージ部)	器(実証機)の立ち上に	
①イメージング検出器の開発 (東北大学)	アンフォー	■ダスト検出器 ((エネルギース/	実証機)の立ち上げ クトル部)	
②エネルギー取得部分の開発 (三菱電機)	ルディング の確立 フィードバック			
③ 実証試験 (JAEA)	プロトタイプ機での推	● ロダスト新規核	出器(実証機)の実証	
(2)宮娘是てエークやじゃの展開	1家の美証	(前周日) *1		*2
(3) 同称車 Fモーダなどへの展開 (東北大学)		(前面))*1 結晶の育成、評価	結晶の育成、評価	(発展研究)東北大のみ 実用化に向けた評価・対応
(4)研究推進・報告書作成等 (全機関)				当該年度は東北大のみ

図 2.1-1 本業務の全体図

(*1は令和元年度に前倒し、*2は令和3年度に延長)

2.1.2 実施体制図

本業務の組織図を図 2.1-2 に示す。初めに、本研究の核となる高機能シンチレータの開発を東 北大学で実施する。また並行して、撮像とエネルギー取得を行う α デブリ検出器の開発を東北大 学と三菱電機で行い、その実証試験を JAEA と行う。これらの開発に際して、三者で緊密な連携を とる。加えて、東北大学で開発した新規シンチレータ材料を利用した、高線量下モニタなどへの 展開も行う。



図 2.1-2 組織図

- 2.2 各年度の成果の目標及び業務の実施方法
- 2.2.1 平成 30 年度
- (1) 高機能シンチレータの開発
 - ① 機能的な構造をもつシンチレータ結晶の開発

α線を検出可能な光に変えるためのシンチレータの改良が、微細なダストでも発見で きるためのキーポイントになる。そのため、下記の特性を満たすような、構造を持った シンチレータの開発を行った。令和3年度は薄いシンチレータなどを開発し、α線から変 換された光が、拡散せずに集光するために、イメージングを行ったときの解像度の向上 を目指した。具体的には、マイクロ引き下げ法、チョクラルスキー法、その他固相反応 法による粉体の探索など、多岐にわたる合成法を用いて探索を進めた。また、その目標 は次の通りである。

- ・5.5 MeVのα線入射での発光量:60,000光子
- ・発光波長:500~700 nm
- 高発光量・長波長発光シンチレータ材料の開発

長波長発光体は、半導体検出器との感度のマッチングが良いほか、高線量モニタの開 発にもつながる新材料である。そこで、次の特性を満たすシンチレータ結晶の開発に取 り組んだ。

- ・5.5 MeVのα線入射での発光量:50,000光子
- ・発光波長:500~900 nm
- (2) α デブリ検出器の開発
 - イメージング検出器の開発
 「放射線顕微鏡」のイメージング検出器の準備を行った。
 - ② エネルギー取得部分の開発(再委託先:三菱電機)

Geant4などのシミュレーションにより得られるデータ、さらに、簡易的なエネルギー 測定装置を構築して取得する、(半)擬似的な生データからアンフォールディング法の 道筋をつけた。

③ 実証試験(連携先: JAEA)

(1)の①などで得られた結晶をもとに、東北大学と実際のデブリないしは擬似的なデブ リを用いたイメージングを行った。平成30年度は、得られたデータをもとに、位置分解 能10 µm以下に近づくような方策(フィードバック)を東北大学と行った。

- 2.2.2 令和元年度
- (1) 高機能シンチレータの開発
 - ① 機能的な構造をもつシンチレータ結晶の開発

平成30年度に引き続き、α線を検出可能な光に変えるためのシンチレータの改良が、微 細なダストでも発見できるためのキーポイントになるため、下記の特性を満たすような、 シンチレータの探索を行った。

- 5.5 MeVのα線入射で発光量:60,000光子
- 発光波長:500~700 nm
- α線(5.5 MeV)の検出効率(入射光子ないしは粒子数のうち、検出できる個数の割合)がγ線(662 keV)のそれの10倍程度以上
- ② 高発光量・長波長発光シンチレータ材料の開発 平成30年度から引き続き、次の特性を満たすシンチレータ結晶の開発に取り組んだ。
 - 5.5 MeVのα線入射で発光量:60,000光子
 - 発光波長:500~700 nm
 - α線(5.5 MeV)の検出効率(入射光子ないしは粒子数のうち、検出できる個数の割合)がγ線(662 keV)のそれの10倍程度以上
- (2) α デブリ検出器の開発
 - ① イメージング検出器の開発

(1)の①で得られたシンチレータ結晶を、マウントして、位置分解能の評価を行った。 ここではイメージングおよびエネルギースペクトルを取得するための新規検出器(「放 射線顕微鏡」の実証機)の開発を三菱電機と共同で進めた。

② エネルギー取得部分の開発(再委託先:三菱電機)

平成30年度に引き続き、Geant4などのシミュレーションにより得られるデータ、さら に、簡易的なエネルギー測定装置を構築して取得する、(半)擬似的な生データからア ンフォールディング法の道筋をつける。また、「エネルギースペクトル取得部分の開発」 のハード部分についても取り組んだ。

そして、実環境において想定されるノイズ要因について補正方法を検討し、実環境に おける測定性能を評価した。より具体的な項目としては、次の通りである。

ア) エネルギースペクトル取得装置の開発

実環境を想定した条件で測定対象となる α 線のエネルギーを正しく取得するため 検出器選定を行い、実環境でのノイズ要因となる β 線の影響なく α 線の全吸収ピー クを検出できる装置構成を検討・検証した。

イ)アンフォールディング法の適用性検証

粒子輸送計算によって作成した応答関数を用いて、逐次近似法によるアンフォール ディング法を上記ア)で得られたデータへ適用した。適用の結果線源として用いた²⁴¹Am

2.2-2
からの α 線エネルギーに対応する線源スペクトルを取得できることが確認し、アンフ オールディング法が適用できることを検討した。

- ③ 実証試験(連携先: JAEA) 東北大学から開発した結晶の提供を受け、その結晶をCCDカメラ等にマウントしα線イメージングの試験を行った。
- (3) 高線量下モニタなどへの展開(東北大学)
 - ① 結晶育成

当初計画から1年以上前倒しで実施する。大強度γ線源(10 TBq以上)などを用いて、 モニタの実証試験を行う。

2.2.3 令和2年度

令和2年度の目標及び方法は下記の通りである。

- (2) α デブリ検出器の開発
 - ① イメージング検出器の開発

令和元年度までの「高機能シンチレータの開発・機能的な構造をもつシンチレータ結晶の開発」で得られたシンチレータ結晶を、マウントして、「放射線顕微鏡」の位置分解 能の評価を行い、下記の条件を満たす撮像装置を開発した。

α 線イメージング:位置分解能10 μm以下

② エネルギー取得部分の開発(再委託先:三菱電機)

α線とノイズ要因(β、γ線)の識別、及びα線のエネルギーを測定可能なアンフ オールディング手法の実装・エネルギースペクトル取得装置の改良と、実サンプルによ る性能確認を行った。具体的には次の1)及び2)である。

1) エネルギースペクトル取得装置の改良

実環境を想定した条件で測定対象となる α 線のエネルギーを正しく取得するため 検出器選定を行い、実サンプルとなる²³⁹Pu、²⁴¹Am、²⁴⁴Cmの3核種を含む線源からの α 線スペクトルが検出できる装置にし、さらにイメージング装置と組み合わせできるサ イズへと小型改良する。

2) エネルギースペクトルへのアンフォールディング法の適用性検証

粒子輸送計算によって作成した応答関数を用いて、逐次近似法によるアンフォール ディング法を上記1)で得られたデータへ適用する。適用の結果線源として用いた²³⁹Pu、 ²⁴¹Am、²⁴⁴Cm の3 核種を含む実サンプルからの α 線エネルギーに対応する線源スペク トルを取得できることが確認し、アンフォールディング法が適用できることを検討す る。 ③ 実証試験(連携先: JAEA)

令和元年度までの「高機能シンチレータの開発」などで得られた結晶をもとに、東北 大学と実際のデブリないしは擬似的なデブリを用いたイメージングを行う。引き続き、 得られたデータをもとに、位置分解能 10 µm 以下になるような方策(フィードバック) を東北大学と行った。また、測定した微粒子の粒子径の情報を用い、作業者の内部被ば く評価への影響や最適な防護具の検討を実施した。

(3) 高線量下モニタなどへの展開(東北大学)

結晶育成

引き続き、大強度 γ 線源(10 TBq以上)などを用いて、モニタの実証試験を行う。 ⁶⁰Co 照射施設などで、線量率と信号量の線形性が、0.1 Sv/h 以上あるかを確認した。

② 東京電力のニーズに対応するための課題

発展的研究として、本項目②が東北大学の実施分として追記され、令和3年度への延 長が行われた。

2.2.4 令和3年度

- (3) 高線量下モニタなどへの展開(東北大学)
 - ① 結晶育成

令和2年度に引き続き、大強度γ線源(10 TBq以上)等を用いて、モニタの実証試験を 行った。⁶⁰Co照射施設等で、線量と信号量の線形性が0.1 Sv/h以上であるかを確認した。

② 現場適用に向けた詳細検討

高線量下モニタが、1FのRPV内部調査において細径長尺センサに関する利用ニーズがあることを踏まえ、引き続き、素子の小型化、光ファイバーの長尺化、耐放射線環境下での伝送性能、校正方法の検討を行った。

そして、実用化に向けた基礎的なデータについて、東京電力へ提供した。

上記の実施事項を、京都大学複合原子力科学研究所のコバルト60ガンマ線照射装置で 行ったとともに、校正曲線を作成し、実際に、1FのRPV内部調査に適用することができた。 さらに、¹³⁷Csとの線量補正についても進めることができた。

- 3. 業務の実施内容及び成果
- 3.1 高機能シンチレータの開発【平成 30 年度~令和元年度】
- 3.1.1 機能的な構造をもつシンチレータ結晶の開発

目的のシンチレータ結晶として、平成 30 年度は次の式 3.1 のように、ガーネット型結晶をチョクラルスキー法(図 3.1.1-1)にて育成した。

 $(Gd_{1-x-y} Ce_x Y_y)_3Ga_3A1_2O_{12}$

式 3.1

ただし、x=0.01、y=0.5/3、1.0/3、1.5/3である。当該材料の選択理由は、式 3.1 において、y=0 のとき、つまり Ce: Gd₃Ga₃Al₂O₁₂(以下、「Ce:GAGG」と略す。)の発光量が46,000 光子/MeV[1]と大 きいことが出発点になっている。ただ、Ce:GAGGでは有効原子番号が50 程度と高く、 α 線検出時 においてはノイズとなる γ 線の検出効率が大きくなるという問題があった。ここで、 γ 線の光電 吸収の効率(光電吸収の断面積)は有効原子の4から5乗に比例する。そこで、有効原子を小さ くすることで γ 線の検出効率を下げるために、Gdの一部をYに置換することに着想を得た。式 3.1 において、y=0.5/3、1.0/3及び1.5/3と置換量を上げていくことで、有効原子番号はそれぞれ49、 46、および44と下がっていくことが計算から分かっている。



図 3.1.1-1 チョクラルスキー法の概念図 ([2]より引用)

JAEA-Review 2022-065

結晶育成には半導体結晶などを作る方法としても利用され、良質でかつ1インチ以上の大型結 晶を育成する方法として知られているチョクラルスキー法を採用して、実際に育成を始めた。原 材料としては、純度が99.99 %以上のY₂O₃、Gd₂O3、Ga₂O₃、α-Al₂O₃、及び、CeO₂を用意し、式3.1 と化学量論比になるように秤量して、結晶育成を行った(図3.1.1-2)。ルツボには育成結晶の融 点と酸化条件に耐えられることからイリジウムルツボを用いた。



図 3.1.1-2 結晶育成時の様子 ([2]より引用)

育成した結晶 (As-grown) は図 3.1.1-3 のようになり、結晶の育成に成功した。育成した結晶 については、まずは発光波長と発光量の調査を行うために、5 mm×5 mm×1 mm (厚) に切断し、 鏡面に研磨を行った。発光波長については、分光器 (Edinburgh Instruments Ltd.、FLS920) を 用いて取得し、発光量については図 3.1.1-4 の通りにセットアップを組み、シングル・フォトン・ カウンティング方式にて発光量の見積もりを行った。すなわち、²⁴¹Am 線源からの 5.5 MeV α 線、 ないしは、¹³⁷Cs 線源からの γ 線を、光電子増倍管 (浜松ホトニクス株式会社、R7600U-200) にセ ットしたサンプルに照射して、光電子増倍管からの信号を前置増幅器 (プリアンプ、ORTEC 社、 Model 113) 及び波形整形器 (ORTEC 社、Model 572A) を通したのちに、AMPTEK 社のマルチチャン ネルアナライザー (MCA8000A) でデジタル化して、PC で記録した。

ここで得られた波高値スペクトルの光電吸収ピークから発光量を求めた。発光量を求めるうえで、比較サンプルとして Bi₄Ge₃O₁₂(以下、「BGO」と略す。)を用いた。BGOの発光量は、5.5 MeVの α 線を照射したときには、9000光子/(5.5 MeV α)ということがあらかじめ校正しており、この 値と比較を行った。



図 3.1.1-3 育成した(Gd_{1-x-y} Ce_x Y_y)₃Ga₃Al₂O₁₂結晶の写真 ただし、x=0.01、(a) y=0.5/3、(b) 1.0/3、(c) 1.5/3 ([2]より引用)



([2]より引用)

これらの測定から、たとえば y=0.5/3 の組成、(Gd_{1-0.01-0.5/3} Ce_{0.01} Y_{0.5/3})₃Ga₃Al₂O₁₂の発光波長は図 3.1.1-5 の通りになり、3 つのサンプルの発光波長をまとめると表 3.1.1-1 のようになった。Y の 置換によって発光波長が若干短波長側にシフトした。これは、発光をつかさどる Ce³⁺イオン周り の電場(結晶場)の変化によるエネルギー準位の変化と考えられる。若干の発光波長の変化はあ ったものの、すべての育成したサンプルの発光波長は目標となる発光波長の 500~700 nm の範囲 に入っていた。

また、波高値スペクトルは図 3.1.1-6 の通りになった。光電吸収ピークの位置が紙面に向かっ

て右に行くほど発光量が高いことを示している。ここで、(i)BGOの光電吸収ピークとの比較、および、(ii)発光波長による光電子増倍管の感度の違いを補正することで、発光量は表 3.1.1-2 のようになった。



図 3.1.1-5 (Gd_{1-0.01-0.5/3} Ce_{0.01} Y_{0.5/3})₃Ga₃Al₂O₁₂の発光波長スペクトル (励起波長:347 nm)([2]より引用)

$(Gd_{1-0.01-y} Ce_{0.01} Y_y)_3Ga_3Al_2O_{12}$	発光波長[nm]	
y=0.5/3	530	
y=1.0/3	525	
y=1.5/3	520	

表 3.1.1-1 (Gd_{1-0.01-y} Ce_{0.01} Y_y)₃Ga₃Al₂O₁₂の発光波長([2]より引用)

表 3.1.1-2 (Gd_{1-0.01-y} Ce_{0.01} Y_y)₃Ga₃Al₂O₁₂の発光量([2]より引用)

(Gd _{1-0.01-y} Ce _{0.01} Y _y) ₃ Ga ₃ Al ₂ O ₁₂	発光量[光子/5.5 MeVα]
y=0. 5/3	\sim 79,000
y=1.0/3	\sim 60, 000
y=1.5/3	\sim 70,000



([2]より引用)

この結果から、Yの置換量による発光量の系統的な変化は見えず、Gd に対して 1/3 を Y に置換 した時の発光量が最低であったが、どのサンプルも 5.5 MeV の a 線入射での発光量で、60,000 光 子という目標値を達成していることが分かった。この発光量のばらつきは、結晶の品質の問題、 たとえば欠陥など、が関連している可能性がある。

さて本研究では、 α 線撮像のために、育成したシンチレータ材料の加工を行った。そこで、図 3.1.1-7に示すように、①(Gd_{1-0.01-y} Ce_{0.01} Y_y)₃Ga₃Al₂O₁₂の厚みを 0.2 mm まで薄くしたサンプルの 合成(面は 10 mm×10 mm)、及び、②片方をレンズ状にしたサンプルの準備に取り掛かった。この うち、②については、研磨条件の最適化や研磨にかかる器具の最適化が必要であり、また対応し たが歩留まりが低い状態であった。

そこで、①についてのみ、実際に撮像機器とマウントして試験を後述のように実施した。

JAEA-Review 2022-065



([2]より引用)

3.1.2 高発光量・長波長発光シンチレータ材料の開発

長波長発光シンチレータ材料として、本研究では臭化物、ヨウ化物に注目して結晶の育成を行った。これまでの研究から、Cs₂HfCl₆という塩化物材料が比較的高い発光量を持つことが分かっており[3][4]、この塩化物をヨウ素化することで、発光機構として考えられる自己束縛励起子発光が長波長にシフトして、赤色になることが予想できた。そこで、今回は CHI を中心に材料の探索を行った。

結晶の育成には図 3.1.1-8 のようなブリッジマン法を用いて実施した。ブリッジマン法では、 原料粉末を入れたアンプルそのものを引き下げて、温度勾配をつけた空間を移動することで、融 点を超えた空間で融液(メルト)になった原料粉末を、温度の低い空間にて固化させて結晶を得 る方法である。

粉末原料としては、99 %の純度の Hf I₄及び同 99.999 %の Cs I を用いた。CHI の融点は 1000 ℃ に満たないため (820 ℃)、アンプルにはイリジウムルツボに比べれば非常に安価な石英ガラスな どを用いることができ、コスト面での優位性が 3.1.1 で述べた β 材料に比べると大きい。



図 3.1.1-8 ブリッジマン法の概念図([2]より引用)

育成した CHI の結晶について、初めての育成では、40%よりもさらに低い透明度であったが、 育成条件の最適化を行いながらの結晶育成の結果、今回のように透明度の改善が見られた。今後 のさらなる条件の最適化でより透明度の高い結晶が得られることが期待できる。通常のシンチレ ータの透過率はおおむね70~90 %程度であり、理論限界値もおおむね90 %程度である。なお、今回の育成では、純度99 %のHfI4を出発原料としているため、残りの1%が透過率の低下を招いている可能性もある。市販されているHfI4原料で、手軽に入手可能な原材料は99%が現状では最高純度である。そこで、今後の課題として出発原料の高純度化があげられる。

今回、初めてのバルク結晶であるため、粉末 X 線回折による相の確認を行ったところ、目的の 相が出ており、CHI が確かに育成できていることが確認できた。発光波長について X 線励起によ る発光を分光器でみると、おおよそ 700 nm の発光波長を有していることが分かった。つまり、発 光波長が 700 nm と長波長発光シンチレータの開発に成功した。

発光波長が 700 nm と長く、光電子増倍管の感度領域から外れていることから、Si-アバランシ ェフォトダイオード(以下、「Si-APD」と略す。)を用いて、波高値スペクトルを取得して、そこか ら発光量を求めた。Si-APD からの信号は、プリアンプ(クリアパルス株式会社、581K)を通した のちに、光電子増倍管での測定と同じ波形整形器、マルチチャンネルアナライザーを通して、PC に記録した。

発光量の測定には、(i)はじめに、シンチレータを取り付けず直接⁵⁷Co線源からの、14 keVのX 線をSi-APDに照射させて、その時に発生した電子数と、(ii)CHIシンチレータをSi-APDに貼り 付けた時に放射線を照射させたときの発生する電子数の比較を波高値スペクトルの光電吸収ピー クから行い、発光量を見積もった。すなわち、⁵⁷CoからのX線を直接照射した場合には、Siでの 電子生成エネルギーが約3.6 eVであることから、(14 keV/3.6 eV) 個の電子が生成される。CHI に放射線を照射したときに生成される電子数を、波高値スペクトルでの(i)の比較から求めたのち には、発光波長でのSi-APDの量子収率から発光量を見積もった。

その結果、 γ 線照射時の発光量は~64,000 光子/MeV と見積ることができた。また、5.5 MeV の α 線でも 60,000 光子/MeV であった。そして、エネルギー分解能は FWHM 値で 4.2±0.2 %(662 keV) と非常に優れている値であることが分かった。

これまで、700 nm 程度の赤い発光波長(長い波長)をもつシンチレータでは、典型的な蛍光寿 命が 100 µs を超えるため、シングル・フォトン・カウンティング法による発光量の評価は難しか ったが、今回、世界で初めて、700 nm の発光波長でシングル・フォトン・カウンティング法によ る評価ができるほどの非常に短い蛍光寿命を持ち、かつ、50,000 光子/MeV を超える発光量と4% 台という優れたエネルギー分解能(662 keV、FWHM)をもつ、高機能シンチレータの開発が行えた。 これらのことから、目標値としていた 5.5 MeV の α 線入射での発光量(50,000 光子)、および、 発光波長の条件(500~900 nm)は達成できた。なお、蛍光寿命(¹³⁷Cs からの 662 keV γ 線照射 時)については、1.9±0.1 µs であった。以上については、[5]にまとめられている。

> **3.1-8** - 40 -

3.2 α デブリ(α ダスト)検出器の開発【平成 30 年度~令和元年度】

3.2.1 イメージング検出器の開発

3.1.1 で育成して、10 mm×10 mm×0.2 mm厚に加工した(Gd_{1-x-y} Ce_x Y_y)₃Ga₃Al₂O₁₂シンチレータ 結晶について、JAEA でのテストの前に、²⁴¹Am (3.7 MBq) からの5.5 MeV α 線励起させて、既存の CMOS カメラで撮像ができるか簡単なテストを行った。当該撮像テスト機器の概念図は図 3.2.1-1 の通りである。



図 3.2.1-1 撮像テスト機の概念図 ([2]より引用)

その結果、(Gd_{1-x-y} Ce_x Y_y)₃Ga₃Al₂O₁₂、y=0.5/3、1.0/3、1.5/3 のどのサンプルでも 10 秒露光で、 図 3.2.1-2 のように、結晶部分が光っていることが分かった。



図 3.2.1-2 撮像テストの結果

([2]より引用)

既存のテスト機での位置分解能の評価になるが、図 3.2.1-2 の結果で、結晶の端での発光のプロファイルからおおよそ位置分解能が 100 µm 程度であった。ここで、テスト機の位置分解能も位置分解能が 100 µm 程度であったため、検出器の位置分解能に律速し、少なくともシンチレータの 位置分解能は 100 µm 以下であることが期待できた。 3.2.2 エネルギー取得部分の開発(再委託先:三菱電機)

① シミュレーションよる模擬データ取得

αデブリ検出器に適用予定のシンチレータを用いてα線を検出した場合の、シンチレータ出力の 模擬データを取得するため、粒子輸送計算コードを用いて放射線の挙動解析を行った。

② 解析モデルの構築

シンチレータでα線を検出した場合のシンチレータ出力(受光素子で得られるシンチレーション光の光量)は、α線がシンチレータに付与するエネルギーΔE、シンチレータの発光効率f_s、受 光素子までの光学系を含めた集光効率f_cの積で表される。

シンチレータのエネルギー分解能は、受光素子で検出できる光子数のゆらぎと、測定回路系の ノイズに起因する。受光素子で検出する光子数のゆらぎは、f_sとf_oを定数とすると概ねシンチレ ータへの付与エネルギーΔE^{1/2}に比例するため、粒子輸送計算コードを用いてα線がシンチレータ に付与するエネルギーΔE を計算し、付与エネルギースペクトルを適切な半値幅を持つガウス関 数でフォールディングすることで、シンチレータの模擬出力を算出した。このとき、スミヤろ紙 に付着した放射性から放出されるα線は、シンチレータに入射するまでに空気中でエネルギーを 失うため、ろ紙とシンチレータの幾何学的条件も正確に模擬してシミュレーションを行った。

本検討では、粒子輸送計算コードとして、欧州原子核研究機構を中心に開発が進められている Geant4[8]および JAEA 等で開発が進められている PHITS (Ver. 3.02) [9]を用いた。

解析モデルを図 3.2.2-1 に示す。測定時に想定される検出器体系のうち、α線の挙動に影響の ある部分を抽出し、シンチレータ、光電子増倍管の窓、光電子増倍管の筐体で構成した。線源は スミヤ法でふき取った場合を想定して円形のろ紙に付着している状態、すなわち薄い円盤状の状 態を模擬した。なお、シミュレーションの整合性を評価するため、円盤状の線源の直径は、測定 (3.2.1 項参照)に用いたα線源(²⁴¹Am)と共通とし、α線のエネルギーは 5.4 MeV とした。表 3.2.2-1 に、構成部材の物性情報を示す。



([2]より引用)

3.2-3 - 43 -

構成部材	構成部材物性情報	
シンチレータ	プラスチックシンチレータ[10]	
PMT 窓	SiO_2	
コリメータ	アクリル	
周辺環境	空気	

表 3.2.2-1 シミュレーションモデルの構成部材([2]より引用)

③ シミュレーション結果

図 3.2.2-2 に、Geant4 及び PHITS により求めたプラスチックシンチレータへの付与エネルギー 分布を示す。図より、2 種類の計算コードの結果はほぼ一致することが確認できた。図 3.2.2-2 に 示すエネルギー付与分布を、測定系のエネルギー分解能でフォールディングし、模擬的なプラス チックシンチレータ出力を得た。ここで、測定系のエネルギー分解能は、付与エネルギーの ΔE^{1/2} に比例するパラメータと測定系回路ノイズから評価した値とした。結果を図 3.2.2-3 に示す。

以上より、シミュレーションにより模擬的なシンチレータ出力を得られることを確認した。な お、本検討では、シンチレータを光電子増倍管に接着した場合の、シンチレータ出力を模擬した が、CMOS カメラを用いる場合においても、シンチレータから CMOS カメラまでの光学系について の光線追跡を行うことで、本検討と同様に模擬的なシンチレータ出力を計算することが可能であ る。





図 3.2.2-3 プラスチックシンチレータ出力のシミュレーション結果 ([2]より引用)

④ 簡易的な装置によるエネルギースペクトル測定

汎用のシンチレータと光電子増倍管及び放射線計測用信号処理回路を用いて簡易的なエネルギー 測定装置を構築し、密封放射線源から放出される放射線のエネルギースペクトルを測定し、エ ネルギー測定部分の模擬データを取得した。

また、放射性物質の位置検出の模擬データを得るため、汎用のシンチレータにピクセル型光電 子増倍管、ピクセル型光半導体、及び CMOS カメラを組み合わせ、密封放射線源から放出される放 射線の位置検出の模擬データを取得した。

⑤ 光電子増倍管を用いたエネルギースペクトルの測定

汎用のシンチレータと光電子増倍管及び放射線計測用信号処理回路を用いてα線のエネルギー を測定した。測定装置の構成を図 3.2.2-4 及び表 3.2.2-2 に示す。光電子増倍管は角型の R7600U を用い、厚さ 0.5 mm のプラスチックシンレータを光電子増倍管の光学窓に合わせ 15 mm 角にカッ トした。



図 3.2.2-4 光電子増倍管を用いた測定装置のセットアップ ([2]より引用)

<u> </u>	
光電子増倍管	浜松ホトニクス株式会社 R7600U
シンチレータ	プラスチックシンチレータ (厚さ: 0.5 mm、反射材なし)
コリメータ	アクリル (厚さ: 2 mm、開口部: Φ 2 mm)
線源	²⁴¹ Am α 線源

表 3.2.2-2 光電子増倍管を用いた測定条件([2]より引用)

図 3.2.2-5 に、光電子増倍管を用いたエネルギースペクトル取得結果を示す。図の横軸は α 線のエネルギーを示しており、5.2 MeV 付近にピークを観測した。この結果から、ろ紙とシンチレータを近接させることで、 α 線のエネルギースペクトルを測定できることが確認できた。一方、プラスチックシンチレータは電子と α 線で発光効率が異なり、その比率(α/β 比)は約 0.07 程度[11]である。そのため、²⁴¹Am から放出される 59.5 keV の γ 線のエネルギーが、見かけ上1 MeV 付近に観測されている。このことから、測定環境中に存在する β 線や γ 線の影響を除去するためには、シンチレータの α/β 比も考慮する必要がある。



([2]より引用)

⑥ CMOS カメラを用いた α 線のエネルギー測定

実機に適用予定のカメラと同等の CMOS カメラを用いてエネルギー取得装置の原理モデルを構築し、α線によるシンチレータの発光を観測した。図 3.2.2-6 に測定装置のセットアップを示す。 測定条件は表 3.2.2-3 に示す通りである。

ポリエチレンブロックと遮光シートを用いて簡易暗室を構成し、CMOS カメラと GAGG シンチレータ、線源をその中に設置した。GAGG シンチレータと CMOS カメラの距離を 25 cm に設定し測定 を行った。

図 3.2.2-7 に測定結果を示す。図に示すように、露光時間 1 秒で γ 線による発光を観測できる ことを確認した。

今後、放射線挙動と光線追跡シミュレーションとを組み合わせた解析との比較を実施し、CMOS カメラで取得したデータを用いたエネルギースペクトル測定方法の検討を進める。



図 3.2.2-6 CMOS カメラを用いた測定装置のセットアップ([2]より引用)

CMOS カメラを用いた測定条件([2]より引用)	
浜松ホトニクス株式会社 C13440-20CU	
25 cm	
1 秒	
GAGG シンチレータ	
(サイズ: 10×10×10、5 面反射材)	
¹³⁷ Cs	



図 3.2.2-7 線源位置の測定結果([2]より引用)

⑦ アンフォールディング法の検討

本研究では、放射性物質の核種同定を精度良く行うために、測定したエネルギースペクトルに 対しアンフォールディング法[12]を適用する。測定値に十分な統計精度が確保できている場合、 アンフォールディングで得られる線源のエネルギースペクトルの精度は応答関数の精度に依存す る。αダスト検出装置におけるアンフォールディング手法では、応答関数は単色エネルギーのα 線をシンチレータで測定した場合のエネルギースペクトル(受光素子で検出したシンチレーショ ン光の光量分布)となる。応答関数は粒子輸送計算と光線追跡シミュレーションによる解析で求 めるため、アンフォールディングで得られる線源のエネルギースペクトルは、シミュレーション による計算結果が測定結果をどの程度再現できているかに依存するため、測定条件に合った検出 器の応答関数を精度良く計算する必要がある。

そこで、測定結果と、測定を模擬したシミュレーション結果との比較を行い、高精度な応答関 数の実現可能性について評価を行った。

図 3.2.2-8 に、③に示した測定結果と⑤に示したシミュレーション結果の比較を示す。図より、 α線の全吸収ピークの形状がよく再現できていることが確認できた。一方で、ピークの低エネル ギー側で、測定値のほうがわずかに高い傾向が確認できる。この原因として、α線のエネルギー に対するシンチレータの発光効率に非線形性[13]があるため、測定値のピークはガウス分布でフ オールディングしたシミュレーション結果に比べ、低エネルギー側が大きくなると考えられる。

今後、発光効率の非線形性を考慮することで、高精度な応答関数を求めることができると考え られる。



図 3.2.2-8 測定値とシミュレーション結果の比較([2]より引用)

次に、汎用のシンチレータと光電子増倍管及び放射線計測用信号処理回路、シリコン半導体検 出器と放射線計測用信号処理回路を用いて簡易的なエネルギー測定装置を構築し、密封放射線源 から放出される放射線のエネルギースペクトルを測定し、実環境でのノイズ要因も含めた環境で 適した検出器での装置構成を選定し、エネルギー測定部分のデータを取得した。

⑧ 光電子増倍管を用いたエネルギースペクトルの測定

汎用のシンチレータと光電子増倍管及び放射線計測用信号処理回路を用いて α 線のエネルギーを測定した。測定装置の構成を図 3.2.2-9 及び表 3.2.2-4 に示す。光電子増倍管は角型の R7600U

3.2-9 - 49 - を用い、厚さ 0.5 mm のプラスチックシンレータを光電子増倍管の光学窓に合わせ 15 mm 角にカットした。



図 3.2.2-9 光電子増倍管を用いた測定装置のセットアップ ([6]より引用)

表 3.2.2-4	光電子増倍管を用いた測定条件([6]より引用)
光電子増倍管	浜松ホトニクス株式会社 R7600U
シンチレータ	プラスチックシンチレータ (厚さ:0.5 mm、反射材なし)
コリメータ	アクリル (厚さ:2 mm、開口部: Φ 2 mm)
線源	²⁴¹ Am α 線源 ⁹⁰ Sr β 線源

表3.2.2-4 光電子増倍管を用いた測定条件([6]より引用)

図 3.2.2-10 に、光電子増倍管を用いたエネルギースペクトル取得結果を示す。図の横軸は α 線のエネルギーを示しており、エネルギー校正では²⁴¹Amの γ 線59.5 keVのピークを用いて校正を行った。²⁴¹Amからの α 線のエネルギー5.5 MeVであるが、空気中での減衰に加えて、シンチレータの電子と α 線での発光効率の違いである α/β 比が 0.07 と小さい[14]ことによる影響で 0.3 MeV に α 線のピークが検出された。

実際の測定環境では α 線核種だけではなく、 β 線放出核種もスミヤろ紙に付着することが想定 される。このため α 線源でのスペクトルに加えて β 線源を使ったスペクトル計測を行い β 線の影響も評価を実施した。図 3.2.2-10 に α 線スペクトルと比較用に⁹⁰Sr でのスペクトルも示した。その結果、 β 線のスペクトルは α 線のピークと重なり β 線の影響が大きいことが分かった。



図 3.2.2-10 光電子増倍管を用いたエネルギースペクトル取得結果 ([6]より引用)

⑨ シリコン半導体検出器を用いたエネルギースペクトルの測定

シリコン半導体検出器(PD)及び放射線計測用信号処理回路を用いてα線のエネルギーを測定 した。測定装置の構成を図 3.2.2-11 及び表 3.2.2-5 に示す。シリコン半導体検出器としては PIN 型ダイオード型の S3590-09 を用いた。

シリコン半導体検出器として S3590-09 を選定した理由としては、検出器面の封止材が無く α線 への感度が高いこと、また、印加電圧として 5 V 程度でα線へ十分な検出感度を有するので、イメージング装置と組み合わせた際のサイズ制約へ大きな影響を与えないことが挙げられる。

線源配置は光電子増倍管での計測時と同じものにした。装置構成は図 3.2.2-11 に示したよう に、シリコン半導体検出器へのバイアス電圧印加用の電源(菊水電子工業株式会社、401)と半導 体検出器用の増幅率の大きいプリアンプ(クリアパルス株式会社、580H)を用いた。プリアンプ 以降の構成は、光電子増倍管での測定と同じものを用いた。測定条件は、表 3.2.2-4 のように検 出器のみ変更し、コリメータ及び線源は表 3.2.2-4 での測定と同等のものとした。



図 3.2.2-11 シリコン半導体検出器を用いた測定装置構成 ([6]より引用)

半導体検出器	浜松ホトニクス株式会社 3590-09
コリメータ	アクリル (厚さ:2 mm、開口部: Φ 2 mm)
線源	²⁴¹ Am α 線源 ⁹⁰ Sr β 線源

表 3.2.2-5 シリコン半導体検出器を用いた測定条件([6]より引用)

図 3.2.2-12 に、シリコン半導体検出器でのα線スペクトルとβ線スペクトルの測定結果を示した。光電子増倍管を使った測定と同様にα線の全吸収ピークが検出された。また、シリコン半導体検出器でのスペクトルでは、59.5 keV のピークで構成した際にα線の全吸収ピークのエネルギーは 4.6 MeV となった。半導体検出器では、シンチレータのように電子とα線での違いは無く、放射線の種類に関係なく付与エネルギーに比例して電子・正孔ペアが作られるので、シンチレータでの計測と異なり線源のエネルギー5.5 MeV に近いエネルギーにピークが検出される。β線のスペクトルは今回の測定では最大エネルギーは 1.5 MeV となり、α線の全吸収ピークへの影響が 無いことが確認された。また、半導体検出器はエネルギー分解能に影響を与えるファノ因子がシンチレータよりも小さいため、エネルギー分解能が向上している[11]。

実際の環境ではβ線の影響が大きいことが考えられることから、今回の測定結果から、α線の 全吸収ピークが影響を受けず、アンフォールディング法への適用が適しているシリコン半導体検 出器によるエネルギー取得がより適していると考えられる。今後、シリコン半導体検出器による エネルギー取得部の開発を進め、イメージ取得部と同時取得できる計測システムを検討する。



図 3.2.2-12 シリコン半導体検出器を用いたエネルギースペクトル取得結果 ([6]より引用)

⑩ アンフォールディング法の適用性検証

アンフォールディング法には、粒子輸送計算による応答関数の作成が必要である。この応答関 数精度がアンフォールディング法の結果へ影響を及ぼす。そのため、3.1節でのα線スペクトルと 粒子輸送計算によるスペクトルの比較を行い、再現性を確認した。粒子輸送計算によって応答関 数を作成し、作成した応答関数を用いて 3.1節でのα線スペクトルに対して逐次近似法によるア ンフォールディング法を適用した。アンフォールディング法によって得られたエネルギースペク トルが²⁴¹Am から放出されるα線のエネルギースペクトルと一致することからアンフォールディ ング法が適用できることを確認した。

1-1 粒子輸送計算によるα線スペクトルの生成

本研究では、放射性物質の核種同定を精度良く行うために、測定したエネルギースペクトルに 対しアンフォールディング法[12]を適用する。測定値に十分な統計精度が確保できている場合、 アンフォールディングで得られる線源のエネルギースペクトルの精度は応答関数の精度に依存す る。αダスト検出装置におけるアンフォールディング手法では、応答関数は単色エネルギーのα 線をシリコン半導体検出器測定した場合のエネルギースペクトルとなる。応答関数は粒子輸送計 算と電荷収集シミュレーションによる解析で求めるため、アンフォールディングで得られる線源 のエネルギースペクトルは、シミュレーションによる計算結果が測定結果をどの程度再現できて いるかに依存するため、測定条件に合った検出器の応答関数を精度良く計算する必要がある。

そこで、測定結果と、測定を模擬したシミュレーション結果(Geant4[13])との比較を行い、図 3.2.2-13に、(2)に示した測定結果とシミュレーションによるα線スペクトルとの比較を示す。図 3.2.2-13より、0.5 MeVから5.5 MeVの範囲でシミュレーション結果がシリコン半導体検出器で の測定結果をよく再現できており、特にα線の全吸収ピーク形状を5%以内の精度で再現できる ことが確認できた。このことから今回導入した粒子輸送計算による応答関数が十分な精度で作成 することができると考えられる。



10-2 粒子輸送計算による応答関数

応答関数は0.05 MeV から7.0 MeV まで0.05 MeV ごとの合計 140 エネルギー分を用意した。 応答関数での α 線源のエネルギーと検出器での付与エネルギーを 2 次元で表した図が、図 3.2.2-14 である。2.0 MeV 以下の α 線は線源から検出器までの空気による減衰により検出器 には到達できないことが分かる。2.0 MeV 以上では α 線の全吸収ピークが形成されているこ とが分かる。この応答関数を使って図 3.2.2-12 で得られたような α 線スペクトルにアンフォ ールディング法を適用する。



図 3.2.2-14 応答関数での線源エネルギーと検出器付与エネルギーの関係 ([6]より引用)

10-3 逐次近似法によるアンフォールディング法の適用

アンフォールディング法としては解の収束性が良い逐次近似法の適用性を評価した[13]。 逐次近似法では、初期の線源スペクトルを測定スペクトルとして用いることで、α線の吸収 ピーク構造をより正確に捉えることができ、解の収束性が良い。逐次近似法では測定結果の 推定値 M'を応答関数 R と推定線源スペクトル S との掛け算で計算する。この計算結果を測 定結果 M と比較することで、次の推定線源スペクトル S'を M/M'×S として計算する。この S'を先の M'の計算の S として用いて、繰り返し計算をすることで逐次的に線源推定スペク トルを求める。測定結果の推定値と測定結果がほぼ一致する S を線源スペクトルとみなすこ とができる。

今回の逐次近似法では、繰り返し回数は解が十分に収束する 10,000 回に設定した。計算に 有する速度は 1 秒以下で現地でのリアルタイムで適用できることが確認された。アンフォー ルディング法を適用した時のスペクトルを図 3.2.2-15 に示した。5.5 MeV にピークが検出さ れ、このピークはエネルギーから²⁴¹Am からのα線、5.49 MeV と対応しており、正しく線源ス ペクトルを得られていることが確認された。今回のアンフォールディング法に用いた応答関 数は 50 keV 幅で作っているため、核種弁別の性能としてはエネルギー幅に対応する 50 keV となる。



図 3.2.2-15 測定(左)とアンフォールディング適用後のスペクトル(右) ([6]より引用)

今回作成して適用した応答関数は⑨での測定系に合わせて作成したものである。現地でスミヤ 法により取得したサンプルについては、測定系に合わせた応答関数が必要となるため、今後、プ ロトタイプ機での測定系に合わせた応答関数を作成する。

α デブリ検出器のエネルギー取得部分として装置に組み込むために、平成 30 年度まで実施し ていたモジュールを使用した測定システムから小型化のために信号処理回路を開発。開発したエ ネルギースペクトル測定装置の性能を α ダストの実サンプルにてデータ取得を行った。

① エネルギースペクトル測定装置の小型化

α線の検出器としては、シリコンフォトダイオード(以下、「Si-PD」と略す。)(浜松ホトニクス株式会社、S3590-09)を用い、周辺からの電磁ノイズ及び遮光のためアルミマイラ(10 μm 以下)を配し、α線の減衰を極力防ぎつつ低ノイズ環境を実現した。後段の信号処理回路を、前置アンプ、メインアンプ、マルチチャンネルアナライザー、それぞれ設計・開発を行い、さらに図3.2.2-16のように、小型化を行った。



図 3.2.2-16 改良したエネルギースペクトル測定装置でのセットアップ([7]より引用)

② JAEA 核燃料サイクル工学研究所(以下、「核サ研」と略す。)での実サンプル測定結果

令和元年度までの検証では、三菱電機が保有する²⁴¹Amのα線源でのみ評価を行っていたが、令和 2年度の検証では、現場で想定される複数のα線核種がある条件での検証を行うため、核サ研に 開発した装置を持ち込み、核サ研が保有する実サンプルにて試験を行った。実サンプルの写真を 図3.2.2-17に示した。サンプルの線源範囲は7 mmのものを使用した。



図 3.2.2-17 実サンプルの写真([7]より引用)

3.2-16 - 56 - 核サ研が保有する実サンプルには α 線核種として ²³⁹Pu、²⁴¹Am、²⁴⁴Cm が含まれている。 核サ研より提供いただいた線源データより、試験で測定対象とした α 線源の表面強度は $1.68 \times 10^5 \text{ min}^{-1}$ となっている。実サンプルのデータを表 3.2.2-6 に記載した。

放射性核種	²³⁹ Pu(半減期:24,400 yr) ²⁴¹ Am(半減期:433 yr) ²⁴⁴ Cm(半減期:17.8 yr)
強度	1. $68 \times 10^{5} \text{ min}^{-1} (2\pi)$ =2. $8 \times 10^{3} \text{ s}^{-1}$ 3. $30 \times 10^{5} \text{ min}^{-1} (4\pi \text{ , 推定值})$ =5. $5 \times 10^{3} \text{ s}^{-1}$
強度測定日	1978年1月9日

表 3.2.2-6 実サンプルの線源データ([7]より引用)

測定は令和2年12月7~8日の2日間で実施し、1回5分間の測定を測定時間中に繰り 返す方法でデータを取得した。取得したエネルギースペクトルを図3.2.2-18に示した。5 分間のデータであるが、3種類の放射性核種に対応したピーク構造が測定できていること を確認し、改良したエネルギースペクトル測定装置が十分な性能であることを実証した。

また、取得したα線スペクトルでのピーク構造は、令和2年度検証したノイズ要因となるβ線エネルギーよりも高いエネルギーで検出できることを確認し、影響を受けないこと が確認できた。β線と近いエネルギーを持つγ線に対しても、同様に影響を受けない。



3.2-17

13 実サンプルデータへのアンフォールディング法の適用

令和元年度に取得した²⁴¹Am の α 線スペクトルで実証したアンフォールディング法を、実サン プルで取得したエネルギースペクトルに対しても同様に適用し、複数種類の放射性核種がある条 件での適用性を検証した。

(4) 実サンプルでのアンフォールディング適用結果

実サンプルデータでのアンフォールディング用応答関数は、0.05 MeV から 7.0 MeV までを 0.05 MeV ごとに合計 140 エネルギー分で作成した。応答関数を作成するための粒子輸送計算では Geant4[14]を用いた。応答関数作成時のモデル体系は、線源情報や測定時の体系で再作成を行い 高精度化させた。アンフォールディング法での演算は③で検証した逐次近似法での演算を実施した。

図 3.2.2-19 に、図 3.2.2-18 で示したエネルギースペクトルに対してアンフォールディング法 を適用した結果を示した。アンフォールディング法適用の結果²³⁹Pu、²⁴¹Am、²⁴⁴Cm、3 核種が分析で きていることが実証された。



また、アンフォールディング法によって得られた α 線の強度を、3 核種それぞれが該当するエ ネルギー範囲で求めると表 3.2.2-7 のようになる。線源データでは含まれる核種それぞれの線源 強度は記載がなかったため、未記入としている。

	²³⁹ Pu	²⁴¹ Am	²⁴⁴ Cm	合計 (2π) 1978 年 1 月 9 日
線源データ	-	-	-	2.8×10 ³ s ⁻¹
アンフォールディング 結果	939 s ⁻¹	618 s ⁻¹	131 s ⁻¹ ↓半減期を考慮 672 s ⁻¹	$2.23 \times 10^3 \text{ s}^{-1}$
比率	_	_	_	0.8

表 3.2.2-7 線源データとアンフォールディング結果の比較([7]より引用)

²⁴⁴Cmは²³⁹Pu、²⁴¹Amよりも半減期が短いため、線源データ取得時から大きく減衰しているため 補正を行った。その結果、表 3.1.2-2 のように線源データから想定される線源強度に対して 20 % の範囲内で測定できることを実証した。さらに、線源データでは測定できていなかった核種ごと の線源強度を、アンフォールディング法を適用することで分析できることを実証した。

3.2.3 実証試験(連携先: JAEA)

① α ダストサンプリングに向けた資機材の整備

JAEA では、α ダストをサンプリングするための資機材の整備をまずは下記の通り実施した。

①-1 空気中 α ダストサンプリング

図 3.2.3-1 左に整備したダストサンプラの外観写真を示す。このサンプラは、最大吸引流量 50 L/min 以上で動作し、ポータブルサンプラとしては比較的軽量(約 15 kg)という特徴を有 し、多くの原子力施設で使用されている実績を持つ。サンプリングホースを接続してサンプラか ら離れた位置のサンプリングも可能である。同時に、サンプラに装着するフィルタ(HE-40T)も 整備した(図 3.2.3-1 右)。HE-40T もまた多くの原子力施設で使われている実績を有し、ダスト サンプリングに適している。



図 3.2.3-1 ポータブルダストサンプラ(左)と HE-40T ろ紙(右)([2]より引用)

①-2 表面汚染 α ダストサンプリング

現場での放射線管理において、表面汚染は一般にスミヤろ紙といわれる円形のろ紙を用いて採 取される。こちらも、国内外の原子力施設や IF で広く用いられている ADVANTEC のスミヤろ紙を 整備した。このスミヤろ紙を用いた粒子のサンプリング試験も行い、サンプリングが可能である ことを確認した(図 3.2.3-2)。IF の原子炉建屋等には高濃度の汚染が存在し、高線量下における サンプリングとなる。IF で安全に、また適切にサンプリングができるように、IF での現場経験者 と意見交換を行い、サンプリング方法の見直し及び訓練を実施した。サンプリングを行ったスミ ヤ同士が汚染しないようにし、かつ迅速にサンプリングできるような方法の検討も行った。



図 3.2.3-2 スミヤろ紙を用いた粒子のサンプリング試験 ([2]より引用)

② JAEA が有する CCD カメラを用いた先行試験

2-1 試験の目的

本試験の目的は、東北大学で製作したシンチレータを JAEA が有する CCD カメラで先行試験する ことにより、 α線イメージング性能を評価し、また、課題点等を抽出することにより今後のシン チレータ開発等へフィードバックすることである。当初計画では、JAEA が保有する核燃料の試料 を模擬的なデブリと見立てた実証試験を行う予定であったが、JAEA 内で汚染トラブルが発生した ため、この実証試験は先送りせざるを得ない状況であった。

2-2 シンチレータ

東北大学で製作したシンチレータを用いた先行試験を実施した。東北大学から受け取ったシン チレータの外観写真を図 3.2.3-3 に示す。シンチレータは単結晶の板状になっており、4、5、6 と ナンバリングがしてある。それぞれ

4: (Gd_{2.5} Y_{0.5}) (Ga, A1)₅ O₁₂ 1 個

- 5: $(Gd_{2.0} Y_{1.0})$ (Ga, A1)₅ O₁₂ 2 個
- 6 : $(Gd_{1.5} Y_{1.5})$ (Ga, A1) 5 O_{12} 2 (II

となっていた。シンチレータのサイズは1 cm×1 cm、厚みは0.2 mm であった。



図 3.2.3-3 東北大学から受け取ったシンチレータ ([2]より引用)

②-3 α線イメージングのセットアップ

図 3.2.3-4 に測定のセットアップを示す。 α 線源として ²³²Th 線源(ランタンマントル)を用い た。ランタンマントルは薄いポリエチレンフィルム(約4 µm)でラミネートされている。そのラ ンタンマントルにシンチレータを密接させた。シンチレータ表面位置に焦点が合うようにシンチ レータとランタンマントルを配置した。 α 線がシンチレータに入射すると発光する。その光を Electron Multiplying (EM) -CCD カメラ(浜松ホトニクス株式会社、ImagEM X)を用いて撮像し た。このカメラは EM (電子増倍)ゲインの機能を有し、低照度下での極微弱光観察に適しており、 量子効率分布も今回用いたシンチレータの発光波長と合っている特長を有する。レンズには株式 会社リコーの FL-CC1614A を用い、10 mm の接写リングをレンズと EM-CCD カメラとの間に挿入し た。これにより、シンチレータとレンズ先端間の距離を約2 cm に縮めることができ、シンチレー ション光のロスを少なくすることができた。レンズ、シンチレータ、線源は暗箱の中に封入され、 さらなる遮光のために暗箱の上から暗幕をかけた状態で測定を行った。ランタンマントルを線源 として用いる放射線イメージを取る際は EM ゲインを最大(255)の状態にして撮像を行った。 全反射により光が拡散するのを防ぐため、シンチレータを粉砕し、粉末状にしたものを作製した。 粉末状にしたシンチレータを薄いポリエチレンフィルムとプラスチックシートで挟んだ。このシ ンチレータシートを用いた測定も行った(図 3.2.3-5)。



図 3.2.3-4 測定のセットアップ ([2]より引用)



図 3.2.3-5 粉末状シンチレータ ([2]より引用)

②-4 測定結果(光学画像)

図 3.2.3-6 に撮像した光学画像の結果を示す。辺縁に多少歪みがみられるものの、中心付近で は歪みの少ない状態で撮像ができていることを確認した。この定規は1 mm 単位で、計測すると48 ピクセルの長さであるため、1 ピクセルの長さは0.021 mm/pixel と評価された。



図 3.2.3-6 光学画像([2]より引用)

②-5 測定結果

図 3.2.3-7 にランタンマントルを線源として用いて得られた画像を示す。左が No.4、右が No.6 のシンチレータを用いて撮像された画像である。辺縁が高い強度になっており、これはシンチレ ータ内部で生じた光が全反射し辺縁に集まっているためと考えられる。シンチレータ内に高い強 度のパターンのようなものが確認できる。このパターンは、目視によって確認したシンチレータ の傷の形状と同じであったため、これはα線によるものではなく、シンチレータ表面にある傷に よるものと考えられる。No.6も同様に傷によるパターンと、辺縁の高い強度の部分が確認できた。



図 3.2.3-7 ランタンマントルを線源として用いて得られた画像([2]より引用) 左が No.4、右が No.6のシンチレータ

ランタンマントルは²³²Th であるため、 α 線を放出するが、同時にその子孫核種の²²⁸Ac 等が β 線を放出している。得られたイメージが α 線によるものか β 線によるものかを識別するため、線源とシンチレータ間に紙(名刺)を置いて撮像も行った。 α 線は紙1枚で止まるので、得られる イメージは β 線のみによるものとなる。図 3.2.3-8 に β 線のイメージング結果を示す。シンチレータは No.6 のものを用いた。 β 線でもシンチレータ全体が発光しており、図 3.2.3-6 と同様、パターンと辺縁の高い強度が確認できる。文字が見えているのは名刺がシンチレータの発光により 反射して写っているためである。つまり、このシンチレータは β 感度を有するため、 α 線のイメ ージングに用いるためには、 β 感度を下げる改良が必要であるということが明らかとなった。



図 3.2.3-8 β線イメージング結果([2]より引用)

図 3.2.3-9 に、粉末状シンチレータを用いて撮像した放射線イメージを示す。プラスチックシートが湾曲していたため、辺縁は焦点が合っていないものの、粉末状シンチレータの形状は確認できる。粉末状のシンチレータ全体が発光しており、 β 線による影響と考えられる。この粉末状シンチレータを用いることにより、図 3.2.3-6、図 3.2.3-7 に示すような全反射により辺縁の強度が高くなる影響は避けられたものの、やはり β 感度を下げる必要があることが明らかとなった。より粉末の粒径を細かくし、 α 線のシンチレータ内での飛程(数+µm)に近づけていけば β 感度が下がるものと考えられる。



図 3.2.3-9 粉末状シンチレータを用いて撮像した放射線イメージ ([2]より引用)

②-6 考察とまとめ

東北大学で製作したシンチレータと JAEA が有する CCD カメラを用いた先行試験を行った結果、 以下のことが明らかとなった。

- 1) 板状のシンチレータの場合、内部で生じた光が全反射し、辺縁や傷の部分に集まり、そこが 高い強度として撮像される。
- 2) 板状のシンチレータを粉砕した粉末状シンチレータを用いることにより1)の影響を抑える ことができた。しかし、β線による感度をまだ有しているため、これを下げる必要がある。

これらの改善点は、実際に東北大学と実験を行うことにより即座に共有することができ、さらなるシンチレータの改良へとつなげていく。

③-1 超高位置分解能 α線イメージング装置

JAEA では、CCD カメラと光学顕微鏡を組み合わせた超高位置分解能 α 線イメージング装置の開発を行った。光学顕微鏡にはオリンパス株式会社の BX53MRF-S を用いた。光学倍率が 5 倍、10 倍、20 倍、50 倍の対物レンズを有している。この光学顕微鏡に CCD カメラをマウントして構成した。 CCD カメラには浜松ホトニクス株式会社の電子増倍 CCD カメラ (EMCCD カメラ) である ImagEM X2 を用いた。EMCCD カメラからの出力信号が IEEE1394 ケーブルを介して PC に伝送される。収集ソフトは、時間積算の画像取得のための "Acquire mode" と任意の時間毎の画像取得のための "Sequence mode"の機能を持っている。熱ノイズの低減のため、EMCCD カメラはスイッチを入れた後自動で-65 ℃まで冷却される。 α 線源を X-Y-Z ステージ上に置き、ZnS(Ag) シンチレータシート (El jen Technology、EJ-440)を密接して置く。暗幕は外部光の遮光のために用い、CCD カメラ と光学顕微鏡を覆う (図 3.2.3-10)。 なお、当初は1Fからサンプル採取を予定していたが、実際にサンプル採取を実施した結果、採 取場所と時間が限られ、本測定の条件に適するサンプルが無かったため、代用サンプルを用いた。



図 3.2.3-10 超高位置分解能 α線イメージング装置 ([6]より引用)

③-2 光学画像の撮像

光学画像の撮像の際は、暗幕を開け部屋の照明を点けた状態で測定を行った。ゲイン(EMゲイン)は0にセットした。焦点位置を合わせた後、キャリブレーションのためのテストチャートを用いて画像のピクセルと実際の距離の校正を行った。倍率を5倍、10倍、20倍に変えて撮像を行った。

③-3 α線のイメージング

光学画像の撮像の際は、暗幕を閉じ部屋の照明を消した状態で測定を行った。ゲイン(EM ゲイン)は 255(最大)にセットした。100 mm×100 mm の 3.44 kBq の ²⁴¹Am 線源を使用し、その上に ZnS(Ag)シンチレータを置いた。焦点位置は ZnS(Ag)シンチレータの表面(シンチレータの 粒子が見える位置)に合わせた。

③-4 プルトニウム粒子の測定

単一のプルトニウム粒子が存在する試料を用い、測定を行った。試料を X-Y-Z ステージ上に 置き、ZnS(Ag)シンチレータシート (Eljen Technology、EJ-440) を密接して置いた。"Acquire mode"と"Sequence mode"の両方で測定を行った。比較のため、ZnS(Ag)シンチレーション検 出器を用いて同じ試料の測定を行った。"Sequence mode"での測定の際は 50 msec 間隔で測定 を行った。
③-5 試験結果

1) 光学画像の撮像

図 3.2.3-11 に光学倍率を5倍、10倍、20倍に変えたときのテストチャートの光学画像を示 す。スリット幅は25 µm である。表 3.2.2-8 に光学倍率と分解能、視野の関係を示す。分解能 と視野はトレードオフの関係となっており、光学倍率を上げると分解能は良くなるが視野が狭 くなる。逆もまた然りである。被ばく評価に用いられるプルトニウム粒子の粒径は1~5 µm 程 度とされているため、20倍の倍率でもその粒径に迫ることは可能である。



図 3.2.3-11 各倍率でのテストチャートの光学画像([6]より引用) (a)5倍、(b)10倍、(c)20倍、スリット幅は25 µm

Zoom	Resolution (Distance / Pixel)	Field of View
5 x	3.28 µm	1679.4 μm×1679.4 μm
10 x	1.63 µm	835.0 µm×835.0 µm
20 x	0.81 µm	412.9 μm×412.9 μm

表 3.2.2-8 光学倍率と分解能、視野の関係([6]より引用)

2) *α* 線のイメージング

図 3.2.3-12 に、光学倍率を 5 倍、10 倍、20 倍に変えたときのα線の画像を示す。これは 1 発のα線が入射した位置を示している。光学倍率を上げることで、α線の形状がより精細に確認できる。図 3.2.3-13 にα線の強度プロファイルを示す。α線の強度プロファイルの半値幅を ガウシアンフィッティングで評価すると、17.9 μm FWHM であった。



図 3.2.3-12 各倍率でのα線の画像 (a)5倍、(b)10倍、(c)20倍 ([6]より引用)





3) プルトニウム粒子の測定

図 3.2.3-14 に、単一のプルトニウム粒子から放出される α 線の画像を示す。光学倍率 5 倍、 測定時間はそれぞれ、1 分、2 分、3 分であった。また、図 3.2.3-15 に、光学倍率 5 倍、30 分 測定の α 線画像及び光学倍率 20 倍、1 時間測定の α 線画像を示す。単一のプルトニウム粒子か ら放出される 1 つ 1 つの α 線が重なって 1 つの集合体を形成している。測定時間を長くすると より多くの α 線が重なっていた。50 msec 間隔の "Sequence mode"で測定すると、1 つ 1 つの α 線画像を取得することができる。この α 線の個数をカウントすることによって、計数率の測 定が可能である。図 3.2.3-16 に測定時間ごとの計数値変化を示す。計数時間を増やすにつれて、 計数値が直線的に増加していることが分かる。超高位置分解能 α 線イメージング装置と ZnS(Ag)シンチレーション検出器の計数値の比は、0.91 であり、妥当な結果であった。



図 3.2.3-14 プルトニウム粒子から放出されるα線の画像(光学倍率5倍) 測定時間はそれぞれ、(a)1分、(b)2分、(c)3分([6]より引用)



図 3.2.3-15 プルトニウム粒子から放出されるα線の画像 (a)光学倍率5倍、30分測定、(b)光学倍率20倍、1時間測定 ([6]より引用)



4) 試験結果のまとめと考察

開発した超高位置分解能α線イメージング装置を用いたα線源の測定とプルトニウム粒子の 測定を行った。α線の強度プロファイルの半値幅は17.9 μm FWHM であり、過去の研究結果[15] を上回るものであった。今回使った EJ-440 の粒子径サイズは約8 μm とされており、α線が通 過する際に複数個の EJ-440 粒子にエネルギーを付与し、それらが発光に寄与したものと考えら れる。

本装置は従来の α 線イメージング装置と比べ幾つかの利点を有し、

1) 光学倍率を変えることができ、低倍率では広い視野での撮像が、高倍率では高い分解能での 測定が可能である。高倍率にすることにより、α線の形状とその分布がより精細に確認できる。

2) "Sequence mode"で測定することにより、α線の計数率が測定できる。現場で放射能の測定 に用いられている ZnS(Ag)シンチレーション検出器と比較しても妥当な計数値であった。

本装置を用いて測定した計数率から、プルトニウム粒子の放射能の評価が可能である。放射 能の評価ができると、被ばく評価に用いる粒子径である空気力学的放射能中央径(以下、「AMAD」 と略す。)の評価が可能になる。令和2年度以降この評価についても進めていく。

④ 超高位置分解能 α 線イメージング装置

④-1 超高位置分解能 α 線イメージング装置

③に記載した通り、JAEA では、高感度 CCD カメラ(電子増倍 EMCCD カメラ)と光学顕微鏡を 組み合わせた超高位置分解能 α 線イメージング装置の開発を行った(図 3.2.3-17)。光学顕微 鏡にはオリンパス株式会社の BX53MRF-S を用いた。 α 線源を X-Y-Z ステージ上に置き、ZnS(Ag) シンチレータ(Eljen Technology、EJ-440)を密接して置き撮像を行う。令和2年度は、 α 線 計測の際に妨害となる、 β 線感度等の他の放射線による影響を調査するとともに、プルトニウ ム試料の測定結果をもとに、粒径分布を評価する手法の構築を行った。また、評価した粒子径情 報を用い作業者の内部被ばく評価への影響や最適な防護具の検討を行った。



図 3.2.3-17 開発した超高位置分解能 α 線イメージング装置([7]より引用)

④-2 β線

1Fの廃炉現場において、α 汚染と β 汚染が混在して存在していることが確認されている[14]。 令和元年度報告において、開発した装置が α 感度を有することを確認したものの、β 感度につ いても確認し、α 線との弁別について確認することは重要である。図 3.2.3-18 に β 線測定の概 念図を示す。1 MBq⁹⁰Sr⁻⁹⁰Y β 線源をステージに乗せ、ZnS(Ag)シンチレータを β 線源上に置き測 定を行った。結果については、後述する。



図 3.2.3-18 β線源測定の概念図([14]より許諾を得て転載)

3.2-31

④-3²²²Rn 子孫核種

²²²Rn 子孫核種も α ダストを測定する際のバックグラウンドの原因となる。そこで、²²²Rn 子孫 核種を α 線イメージング装置を用いて測定した。図 3.2.3-19 に ²²²Rn 子孫核種の測定の概念図を 示す。²²²Rn 子孫核種は、エアサンプラー (DSM-361、日立アロカメディカル株式会社)を使用して、 直径 47 mm のメンブレンフィルター (東洋濾紙株式会社)上に収集された。空気サンプリングは、 ²²²Rn 濃度が約 200 Bq/m³の環境で約 4 時間実行され、サンプリング後に濾紙を回収し測定を行っ た。メンブレンフィルターは直径 50 mm のガラス板に固定し、ステージに乗せ、その上に ZnS (Ag) シンチレータを置き測定を行った。



図 3.2.3-19²²²Rn 子孫核種測定の概念図 ([14]より許諾を得て転載)

④-4 α 線スポットの自動識別方法

粒径分布を評価するにあたり、α線イメージング装置で測定した1つ1つのα線の位置(以下、「α線スポット」と略す。)を定量的に識別する必要がある。そこで、α線スポットの自動識別方法について検討した。自動識別は式 3.2.3-1に示すように画像処理によって行った。

まず、2D ガウシアンフィルタ(平滑化フィルタ)を適用して、イメージセンサーによって画像 に分布するノイズ(宇宙線等に起因するノイズ等を含む)を除去した。このフィルタ適用では OpenCV ライブラリを使用して、以下に示す5×5ガウスフィルタのカーネルを画像に畳み込んだ。 なお、メディアンフィルタ等の他の平滑化フィルタも適用・比較を行い、上記フィルタの S/N が 優れていたことからこちらを用いている。

$$K = \frac{1}{25} \times \begin{bmatrix} 1 & 4 & 6 & 4 & 1 \\ 4 & 16 & 24 & 16 & 4 \\ 6 & 24 & 36 & 24 & 6 \\ 4 & 16 & 24 & 16 & 4 \\ 1 & 4 & 6 & 4 & 1 \end{bmatrix}$$
 $\exists 3.2.3-1$

画像にカーネルを適用しノイズを除去した後、画像にバイナリ処理(2値化処理)を適用して、 α線スポットのエッジ(境界)を検出した。図 3.2.3-20に画像処理前と処理後の画像を示す。最 後に、コンター(輪郭線)を数えることにより α線スポットの数を取得した。これらの処理は、 プログラミング言語 Python により記述した。



図 3.2.3-20 α 線スポットの例 (a) 画像処理前、(b) 画像処理後 画像処理前にランダムに分布するノイズ信号が画像処理によって 除去されていることが分かる。 ([14]より許諾を得て転載)

④-5 Pu02粒子の粒子径分布の評価

PuO₂粒子の等価粒子径(d_e)と空気力学的粒子径(d_{ae})の値は、内部被ばく線量計算に用いる粒子径である AMAD の値を評価するために必要になる[15]。この等価粒子径 d_eは、考慮される粒子と同じ体積の球形粒子の直径として定義されている。

まず、 α 線イメージング装置で測定された α 線の計数値から d_eを計算した。d_eの計算のため 粒子・重イオン挙動解析コード (PHITS) によるシミュレーション計算により PuO₂粒子を再現し、 検出された計数値を PuO₂粒子の d_eに変換する換算曲線を求めた。試料の養生のためのフィルム等 を含む実測と同様のセットアップをシミュレーションで再現した。これにより、粒子や試料その ものの自己吸収の影響を含めることができた。図 3.2.3-21 にシミュレーションの計算体系を示 す。 α 線は、PuO₂粒子から等方に放出させた。また、PuO₂粒子の Pu の同位体組成比については、 同じ施設で代表的に用いられるものを用いた。Pu 同位体毎の α 放射能は、各 Pu 同位体の比放射 能に同位体組成比を掛けることによって決定される。シミュレーションでは、Pu 粒子の等価粒子 径 d_eは 0.5~10.0 µm の範囲で変化させて計算を行った。PuO₂粒子の密度は 11.46 g/cm³とした。

この d_e から、空気力学的粒子径である d_{ae} 値を計算する必要がある。d_{ae} は、以下の式 3.2.3-2 と式 3.2.3-3 を用いて d_e から数値的に解くことができる。これらの式は、ICRP Publication 68[16] に記載されている。

$$d_{ae} = d_e \times \sqrt{\frac{\rho C(d_e)}{\chi \rho_0 C(d_{ae})}}; \qquad \exists 3.2.3-2$$

$$C(d) = 1 + \left(\frac{\lambda}{d}\right) \left\{ 2.54 + 0.800 exp \left[-0.55(\frac{d}{\lambda}) \right] \right\}, \quad \exists 3.2.3-3$$

ここで、 $\lambda = 0.0712 \mu m$ 、 χ と ρ は、それぞれ粒子形状係数(1.8)(実験データ[7]から引用) と質量密度である。 ρ_0 は単位密度(1 g/cm³)である。C(d)はすべりの補正係数(カニンガムの補 正係数とも呼ばれる)である。エアロゾル中の放射能の 50 %は、AMAD より大きい d_{ae}の粒子に関 連する。



図 3.2.3-21 シミュレーション計算体系 PuO₂粒子の等価粒子径を 0.5~10 µm の範囲で変化させた。 ([14]より許諾を得て転載)

④-6 作業者の内部被ばく評価への影響

内部被ばく評価に関して、ICRP Publication 68[16]によると1 μmAMAD または5 μmAMAD に対し て実効線量係数が与えられている。例えば、タイプ M (呼吸気道から血液へ注意の速度で吸収され る沈着物質)の場合、²³⁸Pu では実効線量係数 (Sv/Bq) が 4.3E-05 (1 μmAMAD)、3.0E-05 (5 μmAMAD) となる[16]。今回の手法で、この AMAD を評価できるかを確認した。また、最適な防護装備(呼吸 保護具)の検討を行った。 ④-7 試験結果

(1) β 線の影響

図 3.2.3-22(a)は、50 ミリ秒測定で取得した ⁹⁰Sr-⁹⁰Y β 線源の画像を示す。画像の全領域が ⁹⁰Sr-⁹⁰Y β 線源の領域であった。図 3.2.3-20 に示すような α 線のスポットが確認されていない。 図 3.2.3-22(b)は、10 分間積算測定で取得した画像を示す。50 ミリ秒の同様に、画像上に α 線 スポットが確認されなかった。さらに、50 ミリ秒測定の全測定画像に対し、3.2.3④-4「α 線ス ポットの自動識別方法」に示す判別にかけても α 線スポットが検出されないことを確認した。こ れらの結果は、β 線の影響が無視でき、α 線が明確に区別できることを示している。比較のため、 α 線源を同一の時間で測定した画像を図 3.2.3-23 に示す。



図 3.2.3-22 ノイズとなる β 線の撮像評価 (a)50 ミリ秒測定で取得した β 線源の画像、(b)10 分間積算測定で取得した β 線源の画像 どちらの画像とも、α 線スポットは確認されず、β 線と区別できることが分かる。 ([14]より許諾を得て転載)



図 3.2.3-23 α 線の撮像評価

(a) 50 ミリ秒測定で取得した α 線源の画像、(b) 10 分間積算測定で取得した α 線源の画像 どちらの画像とも、α 線スポットが確認される。([14]より許諾を得て転載)

(2) ²²²Rn 子孫核種

図 3.2.3-24 に 30 分測定で取得した ²²²Rn 子孫核種の画像を示す。 α 線が画像全体に分布して おり、これは ²²²Rn 子孫核種がメンブレンフィルター上に均一に捕集されるためと考えられる。 ²²²Rn 子孫核種のうち ²¹⁸Po や ²¹⁴Po が α 線を放出するが、²¹⁸Po は半減期が短いため、²¹⁴Po の 1本 の α 線が主であると考えられる。PuO₂粒子の場合、1 つの粒子から α 線が継続的に放出される ため、令和元年度報告書[6]で示したように、クラスターとして撮像される。従って α 線の分布 の違いから、PuO₂粒子と ²²²Rn 子孫核種は識別が可能である。



図 3.2.3-24 30 分測定で取得した²²²Rn 子孫核種の画像 α 線が画像全体に分布している。 ([14]より許諾を得て転載)

(3) Pu02粒子の粒子径分布の評価

図 3.2.3-25 は、シミュレーションを使用して計算された α 線計数率から PuO₂粒子の等価粒径 (d_e) への換算曲線を示す。この換算曲線は、y=3.84×d_e^{2.09}として近似できる。測定した α 線計 数率が 214.3±5.2 cpm であり、PuO₂粒子の d_e は 6.9 µm であると評価された。さらに、d_{ae} は式 3.2.3-2 を解くことにより 17.4 µm であると評価された。今回は 1 個の PuO₂粒子のみの測定であ るが、この評価方法を複数の PuO₂粒子に対して適用することにより、AMAD が評価できる。



図 3.2.3-25 α 線計数率から PuO₂粒子の等価粒径への換算曲線 ([14]より許諾を得て転載)

(4) 作業者の内部被ばく評価への影響

今回、図 3.2.3-25 に示すように d_eが 0.5~10 µm までの換算曲線を求めることができた。ここ から d_{ae} を式 3.2.3-2 で評価すると 1.4~25.4 µm となる。実効線量係数は 1 µmAMAD または 5 µmAMAD に対して与えられているが、今回の手法で、1 µmAMAD または 5 µmAMAD かの判断は十分可能と考えられる。

また、呼吸保護具に関しては、電離放射線障害防止規則第38条及び令和2年7月31日付け基 発0731第1号「防じんマスクの選択、使用等について」で定められるように、放射性物質がこぼ れたとき等による汚染のおそれがある区域内の作業又は緊急作業において使用する場合は、RS3、 RL3の性能を有する防じんマスクを選定する必要がある[8]。これに適合するマスクとしては、例 えば、株式会社重松製作所製のDR165N3等が対応する。

④-8 まとめと考察

開発した超高位置分解能 α 線イメージング装置を用いて、内部被ばく評価に必要な粒子径を評価する手法を開発した。開発した手法により、定量的に α 線のスポットを抽出し、その後の粒子 径評価ができるようになった。今回の手法は、従来手法(積分型の検出器)と比較して以下のよう な利点があると考えられる。

- 1) リアルタイムな測定が可能。
- α 線のスポットの位置分解能が高い(~16 µm FWHM) ことから、隣接する Pu02粒子が高精度に識別できる。(ここでは、Pu02粒子とシンチレータ間の α 線の立体的な広がりがないと 仮定する。)
- 3) シミュレーション計算により求めた換算曲線により、PuO₂粒子自体や試料そのもの(養生の フィルム等)の α 線の自己吸収の影響を含めた換算が可能。
- 4) 光学画像と α 線分布の重ね合わせが可能なため、PuO₂粒子の試料上の存在位置を正確に特 定可能。

また、今回評価した d_eが内部被ばく評価(実効線量係数)に必要な1 µmAMAD または5 µmAMAD の粒子径を評価可能であることも分かった。さらに、開発した α 線イメージング装置がモバイル 電源で動作し、電源のない現場でも使用可能であることも確認した(図 3.2.3-26)。これらのこと から、今回開発した超高位置分解能 α 線イメージング装置及び粒子径評価の手法は、廃炉等の作 業現場でリアルタイムに AMAD を決定するのに役立ち、労働者の内部被ばく線量評価に貢献できる ものと考える。



図 3.2.3-26 開発した α 線イメージング装置のモバイル電源での作動確認 ([7]より引用)

3.2.4 イメージング検出器の開発

(実験の流れからここに記述する。図番号については3.2.4とする。)

3.2.1 で取り扱った撮像装置(既存機)などは位置分解能が 100 μm 程度であり、また別用途で 開発したものであるため、本研究では、α線ダスト用に、図 3.2.4-1 及び図 3.2.4-2 のような装 置を開発した。

ここでの改良ポイントとしては、既存機に比べて開口率が 50 %以上高いレンズ(浜松ホトニクス株式会社、M Plan Apo HR 50x)を選択し、CMOSカメラに届く光量を向上させて位置分解能の向上を狙った点が挙げられる。また、3.2.2 で取り扱ったエネルギー測定部分の組み込みも念頭に設計した。



図 3.2.4-1 検出器外観 ([2]より引用)



図 3.2.4-2 α デブリ検出器の設計概念図 ([6]より引用)

なお、αデブリ検出器の名称は、厳密には本研究に則ったデブリを測定するものであり、αダ スト検出器のほうが適当な場合もある。また、当該検出器は、撮像を行う部分と、イメージング を行う部分からなる。

図 3.2.4-3 には完成した検出器(筐体)を載せる。まず初めに撮像部分の動作確認は行い、駆動系などに問題が無いことを確認した。

JAEA-Review 2022-065



図 3.2.4-3 αデブリ検出器の外観 ([6]より引用)

その後、位置分解能をいくつかの方法で評価した。まずは、図 3.2.4-4 にあるような 1951 U.S. Air Force (USAF) resolution test chart という規格のテストチャートを用いて、初めにシンチレ ータを置かず、可視光光源(蛍光灯)を用いて「顕微鏡」として位置分解能を評価した。



図 3.2.4-4 テストチャートの写真([7]より引用) 中心部分のチャートの最小線幅は 2.19 µm である

その結果、可視光としては、中心部分のチャートの最小線幅は 2.19 µm を分解することができ、 位置分解能はそれ以上に優れていることが示唆された(図 3.2.4-5)。



図 3.2.4-5 位置分解能評価の様子 ([6]より引用)

次に、図 3.2.4-6 のようなセットアップで撮像を行い、α 線照射時の位置分解能を評価した。 ただし、α線発生源として、約1 MBq の²⁴¹Am 線源を用いて、線源とテストチャートとの間にシー ト状のシンチレータをはさみ、生じた発光を光源として、テストチャートの影絵(シャドーイメ ージ)を取得した。

ここで、レンズは倍率1倍から2、5及び10倍までを使い、倍率を上げながらピント合わせや 位置合わせを行った。それぞれの測定時間は10秒とした。



その結果、図 3.2.4-7 のように、最小線幅まで、分解することができ、例えば、図 3.1.1-3 に 図示してあるように、線幅 3.91 µm の 3 本線も十分に分解することができた。この結果から、位 置分解能 10 µm 以下は達成したと判断した。



図 3.2.4-7 テストチャートの影絵の結果([7]より引用)

さらに、図 3.2.4-8 のように、シンチレータ部分を一部 α 線放射部分からずらして、撮像をとったときも、図 3.2.4-9 のような結果になった。ここで、A の部分はシンチレータが²⁴¹Am 線源と テストチャートの間にある場合で、B がそうでない場合である。その境界点について、位置分解能 が理想的であれば、色の濃度(光強度の差)が直ちに変化するが、位置分解能をもつため、なだ らかに変化する。この変化をみても、テストチャートを用いた実験と同様に、10 µm 以下の位置分 解能を持つことが分かった。なお、図 3.2.4-9 の赤点線部分 C の、シンチレータの境界部分で、 二重線のようになっているのは、シンチレータ内部での発光した光が光ファイバーのように全反 射して、シンチレータの部分の厚みの断面部分、すなわち縁で光っていることを占めていると考 えられる。

また、図 3.2.4-10 のように、²⁴¹Am 線源をずらしても、放射線部分に相当する位置に応じて発光 が起きていることも確認した。



図 3.2.4-8 位置分解能評価時のセットアップ(発光と不発光の境界測定)の概念図 ([7]より引用)





図 3.2.4-10 線源をずらしたときの様子 ([7]より引用)

実際には、開発したイメージング検出器について、外部での実験となるため、可動式を想定し て、データ制御・収集にかかわる部品(パソコン等)の小型化、及び、可搬型への組みなおしを行 った。さらに、外部電源がなくとも動作可能にするために、蓄電池と太陽電池を取り付けて、電 源の無い環境でも動作可能なように、改良を東北大学にて行った。なお、AC 電源からも電源を取 得できるようにした。

その後、実際に稼働するか、東北大学から JAEA に運び、テストを行い、動作を確認できた(図 3.2.4-11)。また、図 3.2.4-12 のように、エネルギー検出器も組み込むことができた。これは、前項の 3.2.1~3.2.3 を合わせた集大成である。



図 3.2.4-11 可動式にしたイメージング検出器の写真(JAEA にて) ([7]より引用)

(a)

(b)



図 3.2.4-12 開発した装置の写真 (a)開発した装置の全景、(b)サンプル設置用チャンバー部分の中 ([7]より引用)

3.3 高線量下モニタなどへの展開【令和元年度~令和3年度】

3.3.1 結晶育成

①高線量モニタへの応用

1F 1-3 号機では、廃炉手順の1 つとして燃料デブリなど高線量放射性"ごみ"の取り出しが、 要求されており、これらの取り出しには、はじめに、「どのように"ごみ"が分布するか」を確認 する必要がある。しかしながら、炉内の環境は非常に高い空間線量(1 Sv/h 以上)を示すことか ら、数分以内などの比較的短期間で、その場の線量を知ることができるリアルタイムの線量計、 サーベイメータといった放射線計測機器の利用は不可能である。これは、人が立ち入れない以外 にも、放射線検出器が動作しないという問題のためである。

図 3.3.1-1 の②のように、高い線量の環境下では放射線によるノイズや、光検出器への損傷に より正常な動作が保証できない。そこで、シンチレータは高い線量の炉内に入れるものの、光フ ァイバーを使ってシンチレータからの光を比較的線量の低いエリアまで取り出して、そこで光検 出器で読み出すという方法が考えられている(図 3.3.1-1③を参照、以下、「分離型」と略す。)。 この分離型の長所は、高線量場でも測定可能である点に加えて、光ファイバーを取り付けたシン チレータのみを、ロボット(台車)に載せて高線量場に運び、測定することができるため、シス テムとしては単純になる点である。

ただし、炉の外側の線量の低いエリアまでシンチレータの光を伝搬させる必要があるため、光 ファイバーの長さは100 m程度、もしくは、それ以上の長さになる可能性がある。つまり、非常 に明るいシンチレータである必要があるが、図 3.3.1-2 のように、既存のシンチレータの発光波 長領域である 550 nm 以下では、伝達効率が低いという問題点があった。

そこで、3.1節で開発している長波長シンチレータが、当該応用分野へも適用できることに気づき、実際に光ファイバーを利用して、分離型のプロトタイプ機器を立ち上げることとした。





図 3.3.1-2 光ケーブルの伝送損失と波長の関係 値が低いほど、透過率が良い。[17]をもとに作図([6]より引用)

② サンプルの準備

これまでの結果から、一番発光量の明るい CHI を利用して、図 3.3.1-3 のように、サンプルを 準備した。CHI サンプルの厚みは約 1.0 mm で、潮解性があるために、透明なセメントで固めた。 このセメントで固めた状態にあっても、図 3.3.1-4 のように γ線(¹³⁷Cs からの 662 keV)の照射 で、図 3.1.1-4 に準拠したセットアップで、波高値スペクトルを取得して、発光量を求めると、 約 63,000 光子/MeV と、セメントでパッケージする前(約 64,000 光子/MeV)とほぼ同じ発光量が 得られていることが分かった。ただし、⁵⁷Co からの X 線直接照射によって生じた Si-APD での光電 子の数から、発光量を求めている。

また、分離型では、電流モードでの読み出しであるので、重要な指標ではないものの、当該測定(シングル・フォトン・カウンティング法)エネルギー分解能もおおよそ4.4% (FWHM at 662 keV)と非常に良い値であった。



(a) CHI、(b) ルビー



図 3.3.1-4 CHI セメントサンプルの波高値スペクトル ([6]より引用)

また、比較として、Cr 添加 α-Al₂O₃結晶、いわゆるルビー結晶(Ruby)も潮解性はないものの、 セメントでパッケージした(図 3.3.1-3(b))。ルビー結晶は、シンチレータとしての応用例はまれ であるが、長波長(赤色)発光体として、よく知られた材料であり、レーザーなどの分野は汎用 材料の1つである。ただし、ルビーについては、蛍光寿命が100 マイクロ秒以上であることから、 シングル・フォトン・カウンティング法による発光量評価ができないため、図 3.3.1-4 のような 波高値スペクトルは得られない。そのため、正確な発光量の評価は難しい状態であるが、CHIに比 べて発光量が劣っていることは、半定量的にも分かるレベルである。

今回、CHI については、図 3.3.1-3 の写真の目視からも分かるように半透明である。これについては、結晶合成の最適化が必要であり、最適化作業の1 つとして、不純物を取り除く作業が挙げられる。ヨウ化物などは、特に HfI4 などで、もともと需要が無いこともあり、高純度の原料粉末の入手が困難である。

③ 実証試験のセットアップ

京都大学複合原子力科学研究所のコバルト 60 ガンマ線照射装置にて、光ファイバーを用いた分離型の実証試験を実施した。セットアップは図 3.3.1-5 及び図 3.3.1-6 の通りである。



図 3.3.1-5 京都大学複合原子力科学研究所のコバルト 60 ガンマ線照射装置での セットアップ概念図([6]より引用)

ここで、シンチレータの光を読みだす光ファイバーには、株式会社フジクラの20m長のファイバー(S.600/600B)を利用した。なお、組成としては、純SiO2低OHタイプと呼ばれるもので、コアの直径は600±30µmのものを選択した。当然、コアを大きくしたほうが、より多い光を伝達できるが、曲げ半径の制限や、現在入手できるファイバーの種類などの制限から、当該ファイバーを選択した。また、長さについても同様である。

今回のプロトタイプ機器では、<1>Si-PD を用いた単純積分型仕様と<2>分光器を用いた分 光型仕様を提案した。<1>については、シンチレータを取り付けた光ファイバーの反対側に、Si-PD (Thorlabs、SM1PD1A)を取り付け、信号はソースメータ (Keithley Instruments、2441)で読 みだし、PC で記録した。<2>については、分光器付きポータブル CCD (StellarNet、BLACK-Comet XR-SR-TEC)を用いて、光を読み出し、PC にて記録した。



図 3.3.1-6 京都大学複合原子力科学研究所のシンチレータの線源部分への配置の様子 ([6]より引用)

④ 実証試験の結果

<1>Si-PDを用いた単純積分型仕様

図 3.3.1-7 のように、単純積分型仕様では、⁶⁰Co 線源が下の貯蔵庫から上昇し、高線量場環境 になる(オン)と、それまでのオフの状態に比べて、信号強度が上がっていることが分かった。 この値について線量との関係をプロットしたものが図 3.3.1-8 である。ここで、線量の調整は、 あらかじめ測定した空間線量率データを用いて、その校正されたポイントにシンチレータの場所 を移動させることで、空間線率(図 3.3.1-8 の横軸)を調整した。

ここで、図 3.3.1-8 の(a)、(b)ともに青線は、そのエラーバーが電流値の 0 点を交差するイベ ントを表しており、すでに信号が無い可能性もある値となっている。そのため、これら青色のエ ラーバーがついている点は、上限値(upper limit)を示す点と見なせ、それらの点より高い領域 で検出できるとした。そのため、検出限界値として、CHI とルビーそれぞれ~0.05、および~0.2 kSv/h と求まった。以上より、CHI については、発光量が高いこともあり、ルビー結晶よりも低い 線量から、正確な測定ができることが分かった。



(a) CHI、(b) ルビーでの実験結果

<2>分光器を用いた分光型仕様

分光型仕様においては、図 3.3.1-9 のようなスペクトルを各線量で得られることができた。 CHI もルビーも、先行文献と同様の発光波長を観測することができた。また、このスペクトルに ついて、発光スペクトルの発光部分について積分して空間線量との関係性を示すと、図 3.3.1-10 のようになった。やはり、CHI のほうが明るいという結果になった。単純積分型にくらべて、 ルビー結晶でも、より低い線量領域での測定が可能なり、分光仕様のほうがシステムとして感 度が良いことが分かった。

> **3.3-7** - 93 -



図 3.3.1-9 分光型仕様で得られた発光スペクトル([6]より引用) (a) CHI、(b) ルビーでの実験結果



図 3.3.1-10 分光型仕様での線量と電流値の関係([6]より引用)

3.3-8 - 94 - ⑤ 実証試験の結論

今回、世界で初めて、CHIを用いて、分離型の線量測定を非常に線量の高い空間で実施することができた。そして、CHIの高い発光量によって、20mの長いファイバーでも十分に信号を読み出すことができた。なお、当初目標の10TBq以上の線源(約70TBq)を用いて、動作を確認することができた。

⑥ その他の検証(結晶育成法の開発)

CHI やその他のヨウ化物シンチレータは、非常に明るく、かつ、発光波長も 700 nm 程度を中心 とし、数秒以上の長くかつ明瞭な残光も無く、ファイバー読み出しモニタにとって、既存のシン チレータに比べて、条件の合うシンチレータではあった。しかし一点、潮解性がある点が、取り 扱いの上でネックとなっている。また、潮解性を防ぐためのパッケージによって、 a 線への感度 は無い。

そこで、潮解性を示すことが非常にまれである、酸化物での赤色発光シンチレータについても 開発を実施した。ここで、本ファイバー読み出しモニタで使用するファイバーのコア径が 600 μm 程度であることから、光ファイバーの先にとりつけるシンチレータの大きさは、3 mm 角程度以下 になる。そのため、小さい結晶ながらも、γ線に対しての感度を可能な限り持たせるために、有 効原子番号や密度が高い材料を選択する必要がある。ここで、γ線が物質に当たり光電吸収とい う相互作用で、γ線の全エネルギーが物質中の電子にわたる現象での断面積(起こりやすさ)は、 有効原子番号の4から5乗程度に、また密度に比例する。

有効原子番号の大きいもので、かつ、自身が放射性同位元素の影響でγ線を放出しない元素として、これまでHf に注目して、ヨウ化物などの探索も行っており、その結果として CHI なども開発した。

酸化物の場合、Hf を含む材料では融点が2400 ℃を超えるケースが多く、結晶育成が困難であ る点がネックであった。これは、結晶育成時に使うルツボの金属(イリジウムや白金など)が、 2400 ℃程度より低い温度に、融点や軟化点を持つからであり、原料粉末を融解させる前に、ルツ ボ材が耐えられなくなる。

これまでも 2400 ℃を超えるような融点を持つ材料に対して、粉末原料自体をルツボとしたス カルメルト法や、局所的に光などによって加熱して、表面張力の効果で融液の流出を抑えながら 結晶化させるフローティングゾーン法 (FZ) などがあった。しかし、これらの方法には、育成に 長い時間や大量の原料が必要、準備に手間がかかるといった問題があった。そのため、特に、材 料探索のフェーズなど、結晶育成の時間を短くしたいような場合に適用できる方法が求められて いた。

そこで、図 3.3.1-11 のように、既存の金属用のアーク溶解炉を転用し、アーク放電を加熱源として利用した新しい結晶育成方法を開発した。



本方法では、加熱用の金属と原料粉末を水冷式銅容器(銅ハース)の容器の中に入れて、アーク放電によって金属を加熱して、その熱で周りの原料粉末を融解させたのちに、冷却して結晶を 得る。本方法は、CH法と名付けた。本方法では、2時間以内に本育成は終わる。また、銅ハース は「たこ焼き」のようにいくつもの粉体を入れる部位(くぼみ)があるため、連続して結晶育成 が可能である。

CH 法の開発では初めに、既存の育成方法でも結晶育成が可能な Ce 添加 Y₃Al₅O₁₂ 結晶(融点 1970 ℃程度)について、検証を進めた。この Ce 添加 Y₃Al₅O₁₂ 結晶はレーザーなどにも使われる Y₃Al₅O₁₂ 結晶に Ce を添加した光学材料であり、白色 LED 用の材料や、実用例は少ないものの一部 はシンチレータとして使われた実績がある。今回、材料探索で多用され、既存の結晶育成方法で あるマイクロ引き下げ法が適用できる結晶としては融点が比較的高いこと、結晶に欠陥などがあ ると発光特性に影響が出やすい結晶構造であることなどから、本結晶をサンプルとして利用した。

CH 法とマイクロ引き下げ法で育成して(図 3.3.1-12)、結晶としての性能、及び、光学特性を 比較した。その結果、見た目では図 3.3.1-12 のように、CH 法のほうがやや気泡が出やすい点、そ の他欠陥に起因すると思われる蛍光寿命の差が生じたが、発光量など、材料探索に重要は光学特 性に差が無いことが分かった。

これらの結果については、詳細も含めて論文にまとめて出版した[19]。また、プレスリリース もできた[18]。



図 3.3.1-12 Ce 添加 Y₃A1₅O₁₂結晶の写真 CH 法(a) とマイクロ引き下げ法(b) で育成 ([19]より引用、加工、許諾を得て転載)

その次に、CH 法を用いて、融点 2418 Cの Yb 添加 La₂Hf₂O₇(Yb:LHO)などの開発を行った。図 3.3.1-13 は育成したのちに、ファイバー読み出しモニタ用に研磨したもので、ファイバー読み出 しモニタの比較例として、Cr 添加 α -A1₂O₃(ルビー)結晶についても同様に準備した。



図 3.3.1-13 CH 法で育成した Yb:LHO 結晶(研磨後)の写真と 比較用のルビーの写真[7]

これらの、光学特性、及び、コバルト 60 施設での照射実験の結果などは、参考文献[7]を参照 されたいが、また光ファイバー自身からの発光との波長による切り分け能力は CHI よりも優れて いた。ただし、発光量自体は、CHI よりも低く、総合的にみれば、潮解性を気にしない場合には、 CHI が第一候補であることが分かった。

3.3.2 現場適用に向けた詳細検討

素材の検討

これまでの結果から、CHI が第一候補として挙げられ、当該材料を用いた 1F への現場適用に向 けた検討を行うに至った。図 3.3.1-10 から分かるように、これまでの試験(令和 2 年度)では測 定できる上限は kGy/h 以上で、これは京都大学複合原子力科学研究所での設備で達成できる線量 率に律速しており、それ以上の現場でも計測できることが分かっていた。一方で、下限線量率は 10 Gy/h 弱相当であったが、現場適用では、もう一桁低い線量率でも計測できると都合が良いこ とが分かった。

この計測できる線量率のダイナミックレンジを広げること、言い換えると感度を上げるために、 結晶成長の最適化による透過率の向上と、それに伴う発光量の向上をめざした研究を進めた。詳 細は割愛するが、育成条件などの最適化を行うことで最大 1.4 倍程度の発光量の向上に成功した。

また、生じたシンチレーション発光の消光(ロス)を抑え、効率的に分光器に伝達させるため、 光ファイバーのアクセサリー部品についての検討と、最適化も実施した(図 3.3.1-14)。



図 3.3.1-14 開発した光ファイバーのアクセサリー部品などの写真

② 線量校正・モックアップ試験・現場適用

以上の改良を加えた上で、前節3.2の<2>分光器を用いた分光型仕様を踏襲して線量校正を 行った。すなわち、CCD分光器を用いて、図3.3.1-15(a)のように、得られた発光スペクトルの ピーク値から10%までの範囲について積分した値を信号値として計算した。その結果、例えば 図3.3.1-15(b)のような校正曲線を得ることができ、当時の空間線量の校正の都合上、1 Gy/h (Sv/h)程度に相当する値までしか校正できなかったが、外伸してバックグラウンレベルと比較すると、300~500 mGy/h程度までは測定可能であると示唆された。



図 3.3.1-15 校正曲線を求めるための積分範囲を示した発光波長スペクトルの 概念図(a)と校正曲線(b)

なお、この準備段階では、長さ20mの光ファイバーのほかにも、100m長のファイバーを使っ て、CCD分光器で発光を観測するなど、1Fへの応用を見据えた対応を進めていた。また、曲げ半 径の関係から、これまで利用していたコア径が600µmの光ファイバー以外にも、400及び200µm の曲げ半径が小さいファイバーでのテストも実施し、いずれのファイバーでも発光を観測し、か つ、測定可能な線量率の下限値の見積もりを行うことができた。

現場適用に当たっては、CCD分光器から先の読み出しシステム、及び、制御システムの構築も必要であった。これは、1Fという特殊な環境でデータを安全な場所まで伝送し読み出す必要と、現場の作業員の方が操作できるという点が必要だからである。

例えば、CCD 分光器から先について、PC での読み出しや制御を遠隔で行う必要性がある場合に 備えて、PC と CCD 分光器との間の通信系ケーブルの選定を、図 3.3.1-16 のような構成を含めて いくつかの案について試験を行った。そして、信頼性のある読み出し方などについての検証を予 め行い、現場適用に向けた準備を進めた。



図 3.3.1-16 通信系ケーブルの最適化作業の様子(一例)

以上の作業を行ったころ、実際に1Fの現場で利用していただけるという話が来たため、モック アップ試験などを、廃炉環境国際共同研究センター(以下、「CLADS」と略す。)や東京電力及び協 力会社など多くの方のご協力のもとに実施した。そして、実際の現場での適用を頂くことができ た[20][21]。 3.3.3 現場利用を見据えた革新的な検出器の研究開発

実際の現場適用では、無事に計測システムを動作させて、値を算出することができたが、いく つかの課題も見えてきた。特に、求められている線量率のダイナミックレンジを、より広範囲に する必要性があることが、実際の現場での結果から分かってきた。

そのために、分光器の高感度化を進めており、コア径 600 µm の光ファイバーで、100 mGy/h 程 度まで見えるようになってきた。

また、<1>Si-PDを用いた単純積分型仕様、を改良し、<3>光電子増倍管を用いた単純積分型 仕様+光学フィルタの導入、という3番目の方法についても実証試験を行った(図3.3.1-17)。光 電子増倍管自体には波長分別能力は無いものの、本仕様では、1光子ごとにカウントが可能なほ ど高感度である光電子増倍管に、例えば690 nmよりも長波長の光子のみを透過させるような光学 フィルタを置くことで、ノイズとなる短波長側の発光を光電子増倍管の前で遮断して、信号と見 なせる長波長の光子のみを読み出すものである。これにより、コア径600 µmの光ファイバーで、 10 mGy/h 程度までのレンジで線量率を計測できるシステムが整いつつある。



図 3.3.1-17 光電子増倍管と光学フィルタをマウントした写真

実際に図 3.3.1-18 のように、10 mGy/h 程度でも信号を確認した。一方で、1 kGy/h 程度でも 信号を得ることができた。



図 3.3.1-18 光電子増倍管を用いた単純積分型仕様+光学フィルタでの信号

以上のような、改良を加えることで、1F で適用できる範囲・状況をより広くすることができた。 また、現場適用が決まってから実際に適用するまでのスキームについても確立でき、現場サイド の要望が出た場合に、比較的迅速に対応可能な体制になりつつある。

今後は、さらなる感度の向上、ノイズの抑制などの研究開発と合わせて、このスキーム全体を 含めた産業界への技術移転も推し進めていきたい。
3.4 研究推進

本研究を推進するにあたり、これまでに三者による定例ミーティングを定期的に行うとともに、 CLADS 等との連携を密にして、研究を進めた。具体的には、早期の検出器の実用化を目指すための 障害点など、東北大学や三菱電機のみでは知りえない情報や設備等の提供をいただいた。

また、本研究を通じて下記の発表を行うことができ、当時在籍した博士学生2名ともに、2022 年4月現在では、大学の助教ポストについているなど、若手の育成も行うことができた。

研究業績一覧

①論文(査読付き)

- S. Kodama, S. Kurosawa, M. Ohno, A. Yamaji, M. Yoshino, J. Pejchal, R. Král, Y. Ohashi, K. Kamada, Y. Yokota, M. Nikl, A. Yoshikawa Development of a Novel Red-emitting Cesium Hafnium Iodide Scintillator Radiation Measurements 124, pp. 54-58 (2019).
- 2. S. Kodama, S. Kurosawa, M. Ohno, Y. Morishita, H. Usami, M. Hayashi, M. Sasano, T. Azuma, H. Tanaka, V. Kochurikhin, A. Yamaji, M. Yoshino, S. Toyoda, H. Sato, Y. Ohashi, K. Kamada, Y. Yokota, A. Yoshikawa, T. Torii Fiber-read Radiation Monitoring System Using an Optical Fiber and Red-emitting Scintillator for Ultra-high-dose Conditions Applied Physics Express 13(4), p. 047002 (2020).
- 3. S. Kodama, S. Kurosawa, Y. Morishita, H. Usami, T. Torii, M. Hayashi, M. Sasano, T. Azuma, H. Tanaka, V. Kochurikhin, J. Pejchal, R. Král, M. Yoshino, A. Yamaji, S. Toyoda, H. Sato, Y. Ohashi, Y. Yokota, K. Kamada, M. Nikl, A. Yoshikawa Growth and Scintillation Properties of a New Red-emitting Scintillator Rb₂HfI₆ for the Fiber-reading Radiation Monitor IEEE Transactions on Nuclear Science 67(6), pp.1055-1062 (2022).
- S. Kodama, S. Kurosawa, K. Fujii, T. Murakami, M. Yashima, J. Pejchal, R. Král, M. Nikl, A. Yamaji, M. Yoshino, S. Toyoda, H. Sato, Y. Ohashi, K. Kamada, Y. Yokota, A. Yoshikawa
 Single-crystal Growth, Structure and Luminescence Properties of Cs₂HfCl₃Br₃
 Optical Materials 106, p. 109942 (2020).
- 5. Y. Kurashima, S. Kurosawa, R. Murakami, A. Yamaji, S. Ishikawa, J. Pejchal, K. Kamada, M. Yoshino, S. Toyoda, H. Sato, Y. Yokota, Y. Ohashi, A. Yoshikawa Novel Method of Search for Transparent Optical Materials with Extremely High Melting Point Crystal Growth & Design 21(1), pp. 572-578 (2020).

 Y. Morishita, S. Kurosawa, A. Yamaji, M. Hayashi, M. Sasano, T. Makita, and T. Azuma Plutonium Dioxide Particle Imaging Using a High-resolution Alpha Imager for Radiation Protection Scientific Reports 11, 5948 (2021).

②国際学会発表(招待)

7. S. Kurosawa

Development of Novel Red/Near-Infrared Scintillation Materials with Fast Decay Time 8th International Symposium on Optical Materials (IS-OM 8) Wroclaw, Poland 2019年6月13日.

8. S. Kurosawa, Y. Kurashima, A. Yamaji, S. Kodama, M. Yoshino, S. Toyoda, H. Sato, Y. Yokota, K. Kamada, Y. Ohashi, A. Yoshikawa Study on Red-Emission Scintillation Materials ~Crystals & powders~ The 13th Pacific Rim Conference of Ceramic Societies (PACRIM13) Okinawa Convention Center, Japan 2019 年 10 月 31 日.

③国際学会発表(一般講演:口頭)

- 9. S. Kodama, S. Kurosawa, J. Pejchal, R. Král, M. Yoshino, A. Yamaji, Y. Ohashi, K. Kamada, Y. Yokota, M. Nikl, A. Yoshikawa Development of Red-orange-emitting Halide Scintillator for Single Photon Counting, 10th International Conference on Luminescent Detectors and Transformers of Ionizing Radiation, Prague, Czech Republic 2018年9月11日.
- 10. S. Kurosawa, S. Kodama, T. Horiai, A. Yamaji, R. Murakami, Y. Shoji, M. Yoshino, Y. Ohashi, K. Kamada, Y. Yokota, A. Yoshikawa Development of the New Radiation Monitor System Using a Novel Scintillator International Topical Workshop on Fukushima Decommissioning Research (FDR2019) J-village, Naraha, Fukushima, Japan 2019年5月25日.
- 11. S. Kurosawa, A. Yamaji, S. Kodama, S. Yamato, Y. Kurashima, K. Kamada, M. Yoshino, S. Toyoda, H. Sato, Y. Yokota, Y. Ohashi, A. Yoshikawa Optical Study on Garnet-Type Scintillator with Longer-Wave-Emitting 8th International Workshop on Photoluminescence in Rare Earths: Photonic Materials and Devices (PRE'19) Nice, France 2019年9月06日.

- 12. S. Kodama, S. Kurosawa, M. Ohno, A. Yamaji, M. Yoshino, S. Toyoda, H. Sato, Y. Ohashi, K. Kamada, Y. Yokota, R. Kral, J. Pejchal, M. Nikl, A. Yoshikawa Self-Trapped Exciton Luminescence of Anion-Substituted Cesium Hafnium Chloride International Conference on Excited States of Transitions Elements Kudowa Zdroj, Poland 2019 年9月9日.
- Y. Kurashima, S. Kurosawa, R. Murakami, A. Yamaji, K. Kamada, M. Yoshino, S. Toyoda, H. Sato, Y. Yokota, Y. Ohashi, T. Hanada, A. Yoshikawa
 Synthesis of Transparent CaHfO₃ Crystals by the CH Method and its Optical Properties
 2020 International Conference on Solid State Devices and Materials (52nd)
 オンライン、2020 年9月 30 日.
- 14. S. Kurosawa, H. Sone, H. Ujiie, Y. Kurashima, A. Yamaji, K. Kamada, M. Yoshino, S. Toyoda, H. Sato, Y. Yokota, Y. Ohashi, A. Yoshikawa Evaluation of Defect Sites for Gd₃(Ga, Al)₅O₁₂ Based Transparent Ceramics Prepared by the Spark Plasma Sintering Process 20th International Conference on Defects in Insulating Materials (ICDIM2020) オンライン、2020 年 11 月 23 日-27 日発表 (オンライン上でビデオ公開).
- 15. C. Fujiwara, S. Kodama, S. Kurosawa, A. Yamaji, Y. Ohashi, K. Kamata, H. Sato, Y. Yokota, S. Toyoda, M. Yoshino, T. Hanada, A. Yoshikawa Scintillation Properties for Cs2HfBr6-based Crystals Virtual 2021 IEEE Nuclear Science Symposium And Medical Imaging Conference オンライン、2021 年 10 月 20 日.

④国際学会発表(一般講演:ポスター)

- 16. S. Kodama, S. Kurosawa, M. Ohno, Ai Makabe, Y. Morishita, H. Usami, M. Hayashi, H. Tanaka, V. Kochurikhin, A. Yamaji, M. Yoshino, H. Sato, Y. Ohashi, K. Kamada, Y. Yokota, A. Yoshikawa Development of the Fiber-reading Scintillation Detector under Ultra-high Dose Rate 15th International Conference on Scintillating Materials and their Applications (SCINT2019) Tohoku Univ. (Katahira Campus), Sendai, Japan 2019 年 10 月 2 日.
- 17. S. Kodama, S. Kurosawa, M. Ohno, A. Yamaji, M. Yoshino, H. Sato, Y. Ohashi, K. Kamada, Y. Yokota, A. Yoshikawa Synthesis and Optical Properties of Red-emitting A2MI6 Scintillators (A=K, Rb and Cs, M=Zr and Hf)

The 13th Pacific Rim Conference of Ceramic Societies (PACRIM13) Okinawa Convention Center, Japan 2019 年 10 月 28 日.

18. S. Kurosawa, A. Yamaji, C. Fujiwara, S. Ishizawa, A. Yoshikawa Scintillation Properties for Ce-doped Garnet-Type Crystals with Longer-Wave-Emitting virtual 2021 IEEE Nuclear Science Symposium And Medical Imaging Conference オンライン、2021 年 10 月 21 日.

⑤国内学会発表(招待講演)

- 19. 黒澤 俊介
 超高線量場における放射線計測の挑戦 -素子材料とシステム開発第 13 回放射線計測フォーラム福島
 オンライン・東京(ハイブリッド開催)
 2020 年 12 月 11 日.
- 20. 黒澤 俊介
 革新的無機シンチレータの開発とアイソトープ検出への応用
 第 58 回アイソトープ・放射線研究発表会
 オンライン
 2021 年 7 月 8 日.
- 21. 黒澤 俊介

γイメージングとデータ解析
次世代放射線シンポジウム
オンライン
2021 年 8 月 19 日.

⑥国内学会発表(一般講演:口頭)

- 22. 小玉 翔平、黒澤 俊介、森下 祐樹、宇佐美 博士、林 真照、田中 浩基、山路 晃広、吉野 将生、大橋 雄二、鎌田 圭、横田 有為、吉川 彰、鳥居 建男 光ファイバーと赤色発光シンチレータを用いた y 線検出器の開発 第 66 回応用物理学会春季学術講演会、東京 2019 年 3 月 12 日.
- 23. 小玉 翔平、黒澤 俊介、森下 祐樹、宇佐美 博士、鳥居 建男、林 真照、東 哲史、笹野 理、 牧田 泰介、田中 浩基、花田 貴、山路 晃広、吉野 将生、豊田 智史、佐藤 浩樹、大橋 雄二、鎌田 圭、横田 有為、吉川 彰

3.4-4 – 106 –

リモートγ線量モニタの実現を目指した新規赤色発光ヨウ化物シンチレータの開発と放射線 応答特性 第81回応用物理学会秋季学術講演会 2020年9月8日.

- 24. 黒澤 俊介、倉嶋 佑太朗、藤原 千隼、山路 晃広、石澤 倫、石川 志緒利、吉川 彰 高融点材料探索のためのコア・ヒーティング法の開発と材料探索
 日本セラミックス協会 第34回秋季シンポジウム
 2021年9月2日.
- 25. 石澤 倫、黒澤 俊介、倉嶋 佑太朗、山路 晃広、石川 志緒利、藤原 千隼、吉川 彰、田中 浩基
 高線量率下での線量モニタの開発に向けた赤色発光酸化物シンチレータ結晶の探索とその発 光特性
 第 82 回応用物理学会秋季学術講演会
 オンライン
 2021 年 9 月 10 日.
- 26. 黒澤 俊介、倉嶋 佑太朗、石澤 倫、藤原 千隼、山路 晃広、吉川 彰 高融点材料探索のためのコア・ヒーティング法の開発と材料探索 II 日本セラミックス協会 2022 年 年会 オンライン
 2022 年 3 月 12 日.
- 27. 石澤 倫、黒澤 俊介、山路 晃広、吉川 彰
 Nd 添加近赤外発光シンチレータ結晶の探索とその発光特性
 2022 年第 69 回応用物理学会春季学術講演会
 オンライン/青山学院大学(相模原キャンパス)
 2022 年 03 月 22 日.

⑦国内学会発表(一般講演:ポスター)

- 28. 小玉 翔平、黒澤 俊介、吉野 将生、山路 晃広、大橋 雄二、鎌田 圭、横田 有為、Martin Nikl、 吉川 彰
 ハフニウム含有ハロゲン化物 Cs₂HfX₆(X=C1, Br, I)シンチレータの開発と特性評価、
 日本セラミックス協会第 31 回秋季シンポジウム
 2018 年 9 月 5 日.
- 29. 倉嶋 佑太朗、黒澤 俊介、村上 力輝斗、山路 晃広、鎌田 圭、吉野 将生、豊田 智史、佐藤 浩樹、横田 有為、大橋 雄二、吉川 彰 高融点透明光学材料を得るためのアークを用いた新たな材料探索法 第 80 回応用物理学会秋期学術講演会 北海道大学 2019 年 9 月 20 日.

 30. 藤原 千隼、小玉 翔平、石川 志緒利、黒澤 俊介、山路 晃広、大橋 雄二、横田 有為、鎌田 圭、佐藤 浩樹、豊田 智史、吉野 将生、花田 貴、吉川 彰 線量モニタ開発用の赤色発光 Cs₂Hf (I, Br)₆シンチレータの発光特性研究 第 82 回応用物理学会秋季学術講演会 オンライン 2021 年 9 月 23 日.

4. 結言

IFの廃炉工程の中で、重要な解決すべき1つの課題である、α線核種を含むダストの把握を実施するための「放射線顕微鏡」の開発を行ってきた。この放射線顕微鏡では、撮像部分とエネルギー取得部分の2つに分けて開発を進めた。前者については、(1)放射線を可視光に変更する発光材料であるシンチレータ、(2)その光をより効率良く収集するための顕微鏡部分、及び、(3)これらを動かす駆動系の開発が求められた。そして、ガーネット型結晶、その他ハロゲン化物シンチレータなどの開発、レンズなどの最適化、及び、駆動系の立ち上げによって、位置分解能について目標値の10 µm 以下を達成することができた。さらに、後者のエネルギー取得部分についても、シンチレータ方式とAPD 直接方式などを比較して、APD を用いて、かつ、アンフォールディング法を用いた装置が開発できた。そして、撮像部分とエネルギー取得部分を組み合わせ、かつ、太陽電池などを組み込んで、外部電源なしでも動作できるスタンドアロン型の実証機の開発に成功した。現在、「放射線顕微鏡」についても、開発が進んでおり、現場での適用も近いうちに行われると期待している。

これらの研究課題の過程で、新たなシンチレータ材料をいくつか開発できたことから、上記の α ダストモニタ以外にも、光ファイバーを用いた高線量率場の測定モニタの開発を行った。特に CHI を用いたモニタについて、材料の改良とともに、システムの構築も行い、1F での現場適用を 行うことができた。また、そこから得られた課題点なども精査し、その対応も行いより高感度な 装置の開発も進んでいる。

以上の研究開発では、三者の協力・連携が非常によく機能し、さらに、CLADS、東京電力、原子 力安全研究協会をはじめとした各組織からのバックアップも頂いたことから、単なる材料・装置 開発のみに限らず、実際の現場での利用も、迅速に行うことができた。

補足: なお、本報告書の一部は過去の報告書[2][6][7]からの抜粋を含む。

参考文献

- K. Kamada et al., 2 Inch Diameter Single Crystal Growth and Scintillation Properties of Ce:Gd₃Al₂Ga₃O₁₂, Journal of Crystal Growth, vol. 352, no. 1, 2012, pp. 88-90.
- [2] 廃炉国際共同研究センター、東北大学、アルファダストの検出を目指した超高位置分解能 イメージング装置の開発(委託研究);平成30年度英知を結集した原子力科学技術・人材育 成推進事業,JAEA-Review 2019-038, 2020, 57p., https://doi.org/10.11484/jaea-review-2019-038.
- [3] A. Burger et al., Cesium Hafnium Chloride: A High Light Yield, Non-hygroscopic Cubic Crystal Scintillator for Gamma Spectroscopy, App. Phys. Lett., vol. 107, no. 14, 2015, 143505.
- [4] S. Kurosawa et al., Cesium Hafnium Chloride Scintillator Coupled with an Avalanche Photodiode Photodetector, Journal of Instrumentation, vol. 12, 2017, C02042.
- [5] S. Kodama, S. Kurosawa et al., Development of a Novel Red-emitting Cesium Hafnium Iodide Scintillator, Radiation Measurements, vol. 124, 2019, pp. 54-58.
- [6] 廃炉環境国際共同研究センター,東北大学,アルファダストの検出を目指した超高位置分 解能イメージング装置の開発(委託研究); 令和元年度英知を結集した原子力科学技術・ 人材育成推進事業,JAEA-Review 2020-039, 2021, 59p., https://doi.org/10.11484/jaeareview-2020-039.
- [7] 廃炉環境国際共同研究センター、東北大学、アルファダストの検出を目指した超高位置分 解能イメージング装置の開発(委託研究); 令和2年度英知を結集した原子力科学技術・人 材育成推進事業, JAEA-Review 2021-044, 2022, 58p., https://doi.org/10.11484/jaeareview-2021-044.
- [8] J. Allison et al., Recent Developments in Geant4, Nuclear Instruments and Methods in Physics Research Section A: Accelerators, Spectrometers, Detectors and Associated Equipment, vol. 835, no. 1, 2016, pp. 186-225.
- [9] T. Sato et al., Features of Particle and Heavy Ion Transport Code System (PHITS) Version 3.02, J. Nucl. Sci. Technol., vol.55, no.6, 2018, pp.684-690.
- [10] NIST, Material Composition Data, https://physics.nist.gov/cgi-bin/Star/compos.pl (参照日:2022.3.31).
- [11] J. Czirr, The α/β Ratio of Several Organic Scintillators, Nuclear Instruments and Methods, vol. 25, 1963, pp. 106-108.
- [12] G. Knoll 著,神野郁夫他訳,放射線計測ハンドブック 第4版,オーム社,2013,900p., ISBN 978-4-274-21449-3.
- [13] 林真照他, アンフォールディング手法を用いた NaI(T1)シンチレーション式食品放射能分 析装置の開発, KEK Proceedings 2014-7, 2014, pp. 352-360.
- [14] Y. Morishita, S. Kurosawa et al., Plutonium Dioxide Particle Imaging Using a Highresolution Alpha Imager for Radiation Protection, Sci. Rep., vol.11, no.1, 2021, 5948.

- [15] S. Yamamoto, K. Kamada, A. Yoshikawa, Ultrahigh Resolution Radiation Imaging System Using an Optical Fiber Structure Scintillator Plate, Sci. Rep., vol.8, no.1, 2018, 3194.
- [16] ICRP, Dose Coefficients for Intakes of Radionuclides by Workers, ICRP Publication 68, Ann. ICRP, vol.24, no.4, 1994.
- [17] 電子情報通信学会,図1 極低損失長波長帯光ファイバの伝送損失特性, https://dbnst.nii.ac.jp/view_image/1879/3969?height=785&width=475 (参照日: 2022.3.31).
- [18] 東北大学金属材料研究所、プレスリリース・研究成果,コア・ヒーティング法の開発 -革 新的な超高融点材料の探索の迅速化-,2021年1月22日, http://www.imr.tohoku.ac.jp/ja/news/results/detail---id-1301.html (参照日: 2022.3.31).
- [19] Y. Kurashima, S. Kurosawa et al., Novel Method of Search for Transparent Optical Materials with Extremely High Melting Point, Crystal Growth Des., vol.21, no.1, 2021, pp. 572-578.
- [20] 東京電力ホールディングス株式会社、東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析 に係る検討会(第21回)資料 5-3、2 号機シールドプラグ高濃度汚染への対応状況につい て、https://www.nsr.go.jp/data/000358693.pdf(参照日:2022.3.31).
- [21] NRAJapan, 第21回東京電力福島第一原子力発電所における事故の分析に係る検討会(2021 年07月08日), https://www.youtube.com/watch?v=Tdc0iPWyNnI(参照日:2022.3.31).

This is a blank page.